

旧幕府陸軍の解体と静岡藩沼津兵学校の成立

樋口雄彦

The Dissolution of the Shogunate's Army and the Establishment of the Numazu Military Academy in the Shizuoka Feudal Domain

はじめに

- ① 三兵士官学校と沼津兵学校―旧幕府陸軍との断絶と連続―
- ② 幕府陸軍の解体から沼津兵学校の発足へ
- ③ 沼津兵学校付修行兵と静岡藩における常備兵の不在
おわりに

【論文要旨】

徳川幕府の後身たる静岡藩が明治初年に設立した沼津兵学校が、士官養成機関としての進化という、きわめて限定された範囲において、幕末に幕府によって推し進められた軍制改革の最終到達点であるとする評価に誤りはない。しかし、一地方政権である静岡藩と中央政府である幕府との根本的な違いにより、軍制全般においては決して直線的な継承関係をなしていなかった。脱走・壊滅し自然に消え去った海軍は別として、陸軍については、幕府時代に生み出された膨大な兵力は静岡藩では不要とされ、大規模なリストラが実施された。幕府の軍備増強政策は、静岡藩では一転して軍縮路線へと変更されたのである。量的な問題のみならず、質的にも継承されなかったものが少なくない。

本稿では、まず、沼津兵学校と、幕府が幕末段階で設立した三兵士官学校との継承関係の有無について検討する。そして、前者が、フランス軍事顧問団の指導により生まれた後者とは、人的にも組織的にも継続性がないことを明らかにする。

次に、慶応四年（一八六八）五月・六月以降に始まった旧幕府陸軍の解体と再編の過程と静岡藩軍制の成立過程を点検する。幕府瓦解後、とりわけ慶応四年五月以降の陸軍組織の変遷については、『統徳川実紀』、『柳営補任』、『陸軍歴史』といった既存の諸文献には記載がない。つまり、旧幕府陸軍が静岡藩軍制へ接続する途中経過につ

いては、文献上空白であったといえるが、本稿ではその時期の実態を明らかにする。

また、生育方・勤番組という不動・無役者集団を維持しながら常備兵を擁さないという特殊な軍事体制を採用した静岡藩の特徴を、沼津兵学校との関わりの中で考察する。明治三年（一八七〇）沼津兵学校に付置された修行兵という存在が検討対象である。これは、政府の命令によって設置することとされた常備兵三〇〇〇人に相当するものと思われるが、その実態は、定数にはるかに足りなかったばかりでなく、単なる兵卒ではなく下士官候補者であった。

静岡藩は、幕府陸軍時代の多くの遺産を切り捨てざるをえなかったが、一部の良質な部分については的確に引き継いだ。また、旧幕府陸軍にはなかった新たな人脈と発想を付け加え、したたかに明治政府に対した。それが、沼津兵学校であり、修行兵の制度であった。徴兵という形で庶民を軍事に取り込めたか否かという点においては、政府・他藩に遅れをとった静岡藩であるが、士官教育、さらには普通初等・中等教育という非軍事面において、全国をリードする先進性を示したのである。つまり、軍事部門よりも教育部門において近代化が先行したのであり、沼津兵学校は、「兵」学校であるよりも、兵「学校」であることを象徴する存在であった。

はじめに

近世の封建制・身分制にもとづく前近代的軍事組織が廃棄され、近代国家の基礎要件たる国民軍が生まれ有つ過程については、長い研究史があるが、近年は、明治政府の軍制改革に先立つ幕府によるそれに焦点を当て幕末段階での到達点を明らかにする実証的研究が急速に進んでいる⁽¹⁾。もちろん、長州藩・薩摩藩など諸藩の軍制改革も重要なテーマであり、明治政府への影響という点からも看過すべきものではないが、幕府のそれは規模や内容面において、最も主導的・先進的な位置にあったことは間違いない。

本稿が取り上げる沼津兵学校は、江戸幕府の後身たる静岡藩（明治二年途中までは駿河府中藩と呼ぶべきであるが本稿では統一する）が明治初年に設立し、多くの人材を明治陸軍に送り込んだ陸軍士官学校であり、まさに幕府の軍制と明治政府の軍制との結節点にあった存在である。しかし、それ自体に関する研究としては、文化史・洋学史・教育史・科学技術史・書誌学・地域史といった方面からの蓄積は少なくないものの、純粹な軍事史的観点からするアプローチは非常に少ない⁽²⁾。その理由の一端には、戦後の一般向け概説レベルでは、「兵」学校であることを忌避し、むしろ「文明開化の先端」的教育機関として評価しようとする傾向が強かったからである。学問レベルにおいても、沼津兵学校は、その時間的・空間的位置から、過渡的・地域的な存在と見なされた一方、教育の制度・内容面においては極めて高い評価を受けるなど、あたかもその時期その場所のみあつた孤高の存在としてイメージされ、幕府軍制の研究から、明治軍制の研究からも対象外とされ、研究史上取り残されてきたといえる。

そもそも、明治初年、幕府倒壊から廃藩置県にいたる府藩県制時代の

諸藩の軍事史的動向については、各地の藩史や自治体史には何らかの形で言及はされているものの、旧藩時代と明治の軍制とを結び付けるような視点は希薄であつた。多くの場合、藩制時代と明治政府の軍制とは断絶していたからであり、それはある意味で当然のことだつた。徴兵制の先駆的導入を図つた和歌山藩のような特徴的な事例では、研究の蓄積・進展もあるが⁽³⁾、それは数少ない例外といえよう。

それに対し、静岡藩の場合、たとえ一介の大名になつたとはいえ、旧政権たる徳川幕府の遺産を引き継いだ立場にあり、軍制史の上においても他の諸藩とは同列には扱えない国家史的重要性を内包していた。そこで、ここでは、いわば、幕府陸軍と明治陸軍とを結ぶ、軍事史上の「本流」と言つては過言になるが、「支流」になつてしまつた元「本流」という、独特な歴史的存在であることに注目し、沼津兵学校の成立過程と特色について明らかにしてみたい。

①三兵士官学校と沼津兵学校―旧幕府陸軍との断絶と連続―

最初に、静岡藩・沼津兵学校が幕府陸軍から引き継いだものの、引き継がなかつたものとを腑分けする作業から始めたい。

幕府陸軍と静岡藩・沼津兵学校との断絶説ともいうべき見方が生まれ、一番の原因として、江原素六・阿部潜という二人の人物に設立発起者としての功績を帰そうとする「伝説」がある。江原も阿部も幕府時代には陸軍の幹部ではなく⁽⁴⁾、幕府瓦解・静岡藩成立後に抜擢された存在である。つまり、沼津兵学校とは、明治維新を契機に静岡藩が全く新しい発想で設立したものであることを強調し、幕府軍制改革の継承という側面を重視しない説明である。以下に引用するA、B、Cが、その「伝説」の基となつた三種の文献の記述である。

A 沼津兵学校は明治元年十一月に設立せられたれども其端を啓きたるは此年の四月頃にして其發起人は阿部邦之助〔後潜と改む〕並に江原鑄三郎〔後素六と改む〕の二人なりとす⁽⁵⁾

B 元来、私は維新前の際に、是非陸軍の発展を計りたいと思ひました。それを計るには、士官に学問がなければならぬと云ふ事を感じました。(中略)京阪地方に滞在して居る士官を集めて、回読輪講等をなさせた処が、(中略)江戸の方では阿部潜と云ふ人が私と同じやうなことを遣つて居た(中略)その人が相応の計画を以て、一緒に沼津に参つたのであります⁽⁶⁾

C 其の計画は慶応元年先生が京阪に在りし際士官を集めて兵書の回読輪講をなせし時に端を発し、紀州より逃れて江戸に帰りし時阿部邦之助との間に議大ひに熟しつゝ、ありしものゝ如し。蓋し旧幕陸軍の士官養成たる専ら技術の上達にのみ重きを置き、学問の如きは措て問はず、先生深く之を憂ひ、一般兵書の外普通学をも教授する必要あるを力説し、阿部邦之助亦前より之れに着目し士官教育の意見書を草しつゝ、ありしが、先生を見て意気忽ち投合し、両人心を協せ、責任を負ふて其の衝に當るべき事を誓ひ、有司に向つて献策甚だ努む⁽⁷⁾

実は、このような、沼津兵学校設立を江原・阿部の着想であるとする説明は、自治体史や地域史の概説書の叙述において、ほとんど通説となつてしまつてゐるが、現在のところ確実な史料の根拠はない。ただし、後述するように、江原の証言を唯一の拠り所としたと思われるこの説明は、我田引水の自慢話とは言ひ切れず、事実を反映したものである可能性が高い。単なる「伝説」ではなかったかもしれないのである。それを説明する前に、沼津兵学校の起源に關し、それらの通説とは全く違ふ、別の説明についても紹介しなければならない。

それは、沼津兵学校を幕府軍制改革の流れに位置づけた、宮崎ふみ子氏の論文⁽⁹⁾の以下のような記述である。沼津兵学校は、「教育方針や教授方・生徒の構成などの点でも幕末の『三兵士官学校』の系譜をひくものだった(中略)維新前の三兵士官学校よりはるかに整備されてはいるが、その延長上に矛盾なく接続しうる」。宮崎氏は、フランス軍事顧問団を教師として慶応三年(一八六七)江戸に設立された三兵士官学校の分析をした上で、沼津兵学校をその延長上にあると位置づけるのである。論文中に江原・阿部の名前は一切登場しない。

確かに、幕府倒壊直前に生まれた三兵士官学校と、直後に生まれた沼津兵学校とを比較・検討し考察することは必要な作業であつたといえる。しかし、沼津兵学校を「三兵士官学校の再生」と位置づけ、両者をストレートに結び付けたその結論は、実証においては妥当性がないように思える。宮崎氏論文中、沼津兵学校について述べたのは、あくまで「むすびにかえて」部分であり、幕府軍制改革と士官創出過程についての緻密な分析のエピローグ・後日譚として言及されたに過ぎなかつた。それに對し、本稿では、沼津兵学校そのものを分析の対象に置くことで、別の結論を導き出すことになる。

まずは単純に、三兵士官学校と沼津兵学校の特徴を並べてみよう。

〈三兵士官学校〉

〔首脳部〕 浅野氏祐・藤沢次謙ら

〔教授〕 フランス軍事顧問団

〔生徒〕 一四〇一九歳 志願・推薦?強制?↓目付吟味

三六七名(歩兵科のみ、騎兵・砲兵科は実現せず)

〈沼津兵学校〉

〔首脳部〕 (阿部潜・江原素六↓) 西周・赤松則良

〔教授〕 洋学者と旧幕陸海軍人の混成

〔生徒〕 一四〇一九歳 志願↓試業(学力試験)

三〇五〇〇名↓二一八名(歩兵・砲兵・築造科・員外生)

三兵士官学校の首脳部は、浅野・藤沢といった親仏派の陸軍幹部から成っていたが、沼津兵学校は、阿部・江原とも先に述べたように旧幕府時代には決して幹部ではなかったし、開校後に校務の実権を握った西周・赤松則良は陸軍以外の出身者であった。^⑩もちろん、フランス軍人は静岡藩には存在せず、教授陣の顔ぶれは違う。生徒は、年齢的にはほぼ同じであるが、完全な学力試験を採用した沼津兵学校と、「目付吟味」を行ったという三兵士官学校とは、選抜方法が根本的に違うのではないかと考えられる。兵科には、騎兵と築造(工兵)の有無で食い違いがある。これだけでも、両校が直接的な継続関係にあったと断定することは難しい。さらに、個別の人名を付き合わせることで以下のようなことが判明した。使用した史料は、沼津兵学校誕生直前まで旧幕府陸軍局に所属した者の人名を書き上げた、徳川家の駿河移封随従予定者名簿たる「駿河表召連候家来姓名」(慶応四年七月)^⑪である。

【表1】は、「駿河表召連候家来姓名」に記載された約五四〇〇名のうち、陸軍局に属した三四〇〇名余について、その役職別(階級・部隊別)人数と後に沼津兵学校の教職員・生徒となった者の人名・人数を列挙したものである。【表2】は、明治二年(一八六九)陣容が確定して以降の沼津兵学校の各役職に占める旧幕府陸軍出身者(駿河表召連候家来姓名)中の陸軍局所属者の人数・比率を一覧にしたものである。【表3】は、沼津兵学校資業生(学力試験によって選抜された正式な生徒)の各期毎の旧幕府陸軍出身の人数・比率である。

三つの表からは、以下のような諸点を指摘することができる。①沼津兵学校の二等・三等教授は旧幕府陸軍出身者から構成されたが、頭取・一等教授・附属小学校教授・病院医師などは陸軍出身者の比率は低かった。②資業生は、第二・五期までは陸軍出身者の比率が高かったが(そのため特に第二期生・第三期生は「士官連」と呼ばれた)^⑫、第六期以降

は低くなった。③資業生のうち、三兵士官学校の生徒だったことが判明するのはわずか四名であり(堀江当三・中島豊蔵・小林秀一・神津道太郎)^⑬、逆に三兵士官学校生徒出身者には無縁移住者、すなわち静岡藩には不要とされた人員に含まれた者がいたことから(相良勤番組河野四郎・多賀谷道正・高野弥七郎)^⑭、三六七名の三兵士官学校生徒を優先的に沼津兵学校の生徒に編入するといった、意図的な接続政策は全く見出せない。

①②③より総合的に判断すれば、沼津兵学校は、教職員・生徒の双方において、旧幕府陸軍のみを構成要素としたのではなく、開成所・外国方・海軍などの他機関出身者をも取り入れた混成組織であり、ましてや三兵士官学校の直接的系譜をひくものとはいえない。とりわけ、西(開成所)・赤松(海軍)という陸軍外出身者の影響力の大きさは、静岡藩になってから発揮されたものであり、親仏派の陸軍当局とフランス軍事顧問団によって推進された幕末段階の三兵士官学校との差異を考えざるをえないのである。三兵士官学校には規則書は存在せず、教育の実態も不明のため、推測の域を出ないが、たぶん、西・赤松が起草した学校規則(「徳川家兵学校掟書」「徳川家兵学校附属小学校掟書」)の内容面からも、両校の違いを指摘することは可能なかもしれない。

②幕府陸軍の解体から沼津兵学校の発足へ

では、幕府陸軍と静岡藩沼津兵学校とは、どのような経過の中で連続面と断絶面とが生まれたのであろうか。この節では、江戸幕府の正史である『統徳川実記』、幕府官僚の任免記録である『柳営補任』、勝海舟が編纂した幕府陸軍の史料集『陸軍歴史』などには記録されなかった、慶応四年(一八六八)五月頃から明治元年一〇月頃までの、史料・研究の「空白期」に着目し、幕府陸軍の解体から静岡藩の軍事制度および沼津

表1 慶応4年7月「駿河表召連候家来姓名」陸軍局員中に占める後の沼津兵学校教職員・生徒の地位

役職(明治陸軍階級)	総数	氏名(明治2年以降役職)	人数
陸軍頭	1	阿部潜(少参事・軍事掛)	1
陸軍頭並	1		0
陸軍用取扱	69	江原素六(少参事・軍事掛) 笠島重易(軍事掛筆生) 大築尚志(一等教授) 塚本明毅(同前) 乙骨太郎乙(二等教授) 万年千秋(三等教授) 間宮信行(同前) 天野貞省(同前) 蓮池新十郎(同前) 中根淑(同前) 蘭鑑(同前) 小野金蔵(絵図方) 小野田東市(附属小剣術教授方) 浅田耕(沢田学校所教授方) 杉田玄端(沼津病院頭取) 津田為春(沼津病院三等医師) ②池田保光 ③片山直人 ④原胤列	19
小筒組之頭・書院組之頭・広間組之頭・遊撃隊頭・精鋭隊頭(大佐)	7	平岡茅作(三等教授)	1
小筒組之頭並・大砲組之頭並・書院組之頭並・広間組之頭並・精鋭隊頭並(中佐)	10	立田彰信(生育方頭取) 久須美祐利(三等教授) 掛斐章(同前) 森川重申(同前)	4
馬乗頭取・小筒組差図役頭取・大砲組差図役頭取・書院組差図役頭取・広間組頭取・遊撃隊頭取・精鋭隊頭取(大尉)	97	桑原文蔵(軍事俗務方頭取) 中川冬得(同前) 野沢子三郎(同前) 浅井道博(二等教授) 永持明德(三等教授) 高島茂徳(同前) 黒田久孝(同前) 羽山縁(体操方) 小林省三(沼津病院調役頭) ②三谷隆造 ②真野肇 ②石井至凝 ③石川春明 ③山下宣彰 ③原田信民 ④大岡忠良 ④野沢房迪 ④愛知信元 ④佐久間信英 ④長野甚太郎 ⑤稲葉錠次郎 ⑤折井正和 大久保一(生徒)	23
広間組改役	2	③千種頭信	1
広間組頭取並	1		0
広間組頭取並勤方	2		0
馬乗差図役・小筒組差図役・大砲組差図役・書院組差図役・広間組差図役(中尉)	76	北脇弥七郎(軍事俗務方頭取) 増井以孝(軍事俗務方頭取介) 大野寛一(同前) 前田文太郎(軍事俗務方) 山内勝明(三等教授) 神保長致(同前) 江原要人(絵図方) 伊藤隼一(調馬方) 荻谷祐之(附属小体操世話方) ②溝口衛 ②渡部当一 ③大平俊章 ③芳賀勝貞 ③岡田忠良 ④福田知至 ④山内定一 ④小森儀一 ④山口信邦 ④生島準 ④倉林五郎 ④岡部長民 ④瀬名義利 ④林忍 ⑤細井均安	24
馬乗差図役並・小筒組差図役並・大砲組差図役並・書院組差図役並・広間組差図役並(少尉)	83	金子龍太郎(軍事俗務方頭取介) 山崎兼吉(軍事俗務方) 福島釜次郎(同前) 外川作蔵(同前) 山田甲次郎(軍事俗務方介) 斎藤純孝(軍事掛筆生) 石橋好一(三等教授) 函館大経(御馬方) ②渡部当次 ②田付直男 ③加藤寿 ③阿久沢義有 ③古川宣營 ④豊田金十郎 ④小林秀一 ④箕輪信文 ④市川芳徹 ⑦六郷熊三郎 ⑧多門祐二 水原嘉与古(生徒)	20
広間組改役下役	1		0
馬乗差図役下役・小筒組差図役下役・大砲組差図役下役・書院組差図役下役・広間組差図役下役(曹長)	87	若杉秀行(軍事俗務方) 芳村重亮(軍事俗務方介) 鈴木高信(喇叭方教授) 福島惟成(附属小体操教授方) 別所貫一(同前) ②江間経治 ③望月二郎 ③桜木周一郎 ④伊庭真 ⑤大門辰次郎	10
書院組改役下役	1		0
馬乗差図役下役並・小筒組差図役下役並・大砲組差図役下役並(軍曹)	174	林清造(軍事掛筆生) 鈴木貞三郎(同前) 石丸三九郎(同前) 桑島伝五郎(沼津病院附馬医) 塚田金蔵(沼津病院調役) 丸橋清太郎(同前) ②堀田維禎 ②吉村幹 ②中川将行 ②島田隨時 ②中村省三 ③入江倫愛 ③鈴木知言 ③矢吹秀一 ③吉田泰正 ③坂本英延 ④高橋成則 ④亀岡為定 ④岡田正 ④仙波種艶 ④笹瀬元明 ④飯野忠一 ④関近義 ④渡辺英興 ④山口圭三 ④栗野勘吉 ⑥増井恒三郎 鶴沢光先(俗事生徒) 安藤勝太郎(同前) 築山確郎(△生徒) 天野駒吉(同前)	31
小筒組嚮導役・大砲組嚮導役・書院組嚮導役・広間組嚮導	97	高橋晋平(軍事俗務方) 柏原淳平(火工方) 柳田真八郎(附属小体操世話方) 岡島小太郎(同前) 脇屋辰太郎(附属小素読教授方) ⑤村田継蔵	6
小筒組・大砲組・書院組・広間組・遊撃隊士・精鋭隊士(兵卒)	2,650	③飯島正一郎 ③滝野盤 ③本多鉄三 ⑤長坂録蔵 大木鎭吉(生徒?) 石川八十五郎(生徒) 立田正道(生徒) 初鹿野敬三郎(生徒) 小林鉄弥(生徒)	9
医師	1		0
馬医取締	4	深谷周三(沼津病院附馬医)	1
馬乗役	6	佐藤源吾(御馬方) 津田房太郎(同前) 高島友吉(同前) ③木部決	4

雇(馬乗)	34	人見彦次郎(御馬方) 林謙治(同前) 平島惣吉(同前) 天野平次郎(同前) 近藤弘次郎(同前) 沢田徳三郎(同前) 乙骨六郎(同前) 金子源太郎(同前) 狩野鉄五郎(同前)	9
陸軍会計用取扱	2		0
千人隊之頭	7		0
千人隊	3		0
遊撃隊肝煎	31	伊東鋸一(附屬小剣術教授方)	1
遊撃隊並雇肝煎	4		0
精鋭隊取締	11		0
合 計	3,462		164

※参考 陸軍局員以外の人物

中老	4	服部常純(大参事・軍事掛)	1
祐筆雇	16	清水又八郎(軍事俗務方頭取介) 樋口考八郎(軍事俗務方)	2
洋学教師	12	榊紳(三等教授並) 杉亨二(員外教授) 杉田玄端(沼津病院頭取)	3
軍艦役並	17	赤松則良(一等教授)	1
軍艦役見習三等	44	山田昌邦(教授方手伝)	1
軍艦並勤方一等	1	伴野三司(軍事俗務方)	1

※これ以前の別史料から陸軍に所属した履歴が判明している人物

〔少参事・軍事掛〕藤沢次謙(陸軍副総裁) 〔軍事俗務方頭取〕川口嘉(歩兵差図役勤方) 〔軍事俗務方〕曾根利直(騎兵差図役下役勤方) 〔軍事掛附出役〕江川永脩(歩兵差図役並) 〔三等教授並〕杉浦赤城(砲兵差図役並勤方) 〔調馬方〕岩波勝常(騎兵差図役下役並) 〔体操方〕山口知重(小隊長) 〔体操方〕本多忠直(歩兵頭並) 〔喇叭教授方〕梅沢有久(喇叭手嚮導役) 〔附屬小教授方並〕吉村右文次(撒兵差図役下役) 〔附屬小手跡教授方〕永井直方(御持小筒組勤方) 〔附屬小算術教授方〕関大之(仏蘭西陸軍歩兵科伝習人) 〔附屬小剣術教授方手伝〕陶山儀三郎(仏蘭西陸軍歩兵科伝習人) 〔学校附屬〕大野伴三(工兵差図役頭取勤方) 〔沼津病院附製錬掛〕渡辺安五郎(小筒組) ②荒川重平(小筒組差図役下役並) ②永峰秀樹(撒兵並勤方) ②大川通久(小筒組) ③中島豊蔵(仏蘭西陸軍歩兵科伝習人) ④志村貞鏡(歩兵差図役) ④石橋絢彦(撒兵) ④土屋氏貴(軍事掛) ④神津道太郎(仏蘭西陸軍歩兵科伝習人) ④永井当昌(撒兵差図役並勤方) ④倉林五郎(歩兵差図役頭取勤方) ⑤中島静(歩兵差図役下役並勤方) ⑥横地重直(撒兵) ⑦近藤義尚(撒兵) ⑦雨宮知剛(撒兵) ⑦武藤孝長(撒兵) ⑧堀江当三(仏蘭西陸軍歩兵科伝習人) ⑨野口保三(撒兵)

兵学校の成立までの過程を跡付けていくこととする。

鳥羽・伏見敗戦後の旧幕府にとって、まずは敗戦のショックを収め、東征を開始した新政府軍にどのように向かい合うかを決めねばならなかった。徹底抗戦を叫ぶ強硬派を抑え込んだ勝海舟は、陸軍総裁(慶応四年一月二三日)や軍事取扱(二月二五日)といった役職に就き、政治的・軍事的に全権を掌握し、四月一日には江戸城を明け渡す。

二月には歩兵組の脱走騒動が起きるなど、敗戦による混乱は早くから始まっていたが、治安維持と脱走・抗戦派の鎮撫とを目的に、近藤勇・古屋佐久左衛門らの甲信派遣(三月一日)、信太郎之助・江川永脩・松波権之丞・乙骨太郎乙・中根淑・多賀春帆・片山直人・土屋氏貴・阿部潜らの軍事掛手附・鎮静方任命と府下・関東各地への派遣(二、四月)、陸軍奉行並松平太郎の野州辺屯集兵士鎮撫派遣(四月二九日)といった、一連の行動が勝によって実施された⁽¹⁶⁾。しかし、勝の意図とは別に、鎮撫する側の派遣者が脱走・抗戦派に変身するなど、混乱には拍車がかかる。旧幕臣・旧幕府軍の江戸脱走と新政府軍との戦闘は本格化し、大鳥圭介らの北行・転戦(四月)、撒兵隊の両総戦争(閏四月)、彰義隊の上野戦争(五月)、遊撃隊の箱根戦争(五月)といった具合に戦争が続発する。

その一方、勝によって貫かれた徳川家の恭順姿勢は、田安亀之助の徳川家相続許可(閏四月二九日)、駿府七〇万石移封決定(五月二四日)という、新政府の寛典を引き出すことに成功した。

そうすると、次に徳川家では、脱走兵の処置は新政府軍に任せ、駿河移封の準備に専念することとなる。ここでは、旧幕府の陸軍部門に限って説明する。まずは、リストラである。

徳川家では七〇万石の地方政権にとって分不相応な部門の切り

表2 沼津兵学校教職員に占める旧幕府陸軍出身者

職 名	総 数 (人)	旧 陸 軍	比 率
頭取	1	0	0%
一等教授方	5	2	40%
一等教授並	1	0	0%
二等教授方	2	2	100%
三等教授方	16	16	100%
三等教授並	5	0	0%
員外教授方	1	0	0%
教授方手伝	5	0	0%
絵図方	3	2	67%
火工方	1	1	100%
書記方	2	0	0%
調馬方	4	1	25%
喇叭方教授	3	1	33%
喇叭方出役	14	0	0%
体操方	5	1	20%
御馬方	18	13	72%
兵学校合計	86	39	45%
附属小教授方並	1	0	0%
附属小手跡教授方	3	0	0%
附属小素読教授方	5	1	20%
附属小素読教授方並	2	0	0%
附属小算術教授方	2	0	0%
附属小剣術教授方	2	2	100%
附属小剣術世話方	4	0	0%
附属小体操教授方	2	2	100%
附属小体操世話方	4	3	75%
附属小附	1	0	0%
附属小女生徒教員	1	0	0%
沢田学校所教授方	1	1	100%
万野原学校所頭取	1	0	0%
同上手習算術教授方	1	0	0%
同上手習教授方	1	0	0%
同上素読教授方	1	0	0%
附属小学校合計	32	9	28%
沼津病院頭取	1	1	100%
沼津病院重立取扱	1	0	0%
沼津病院二等医師	1	0	0%
沼津病院三等医師	4	1	25%
沼津病院三等医師並	6	0	0%
沼津病院附属	1	0	0%
沼津病院製錬方	1	0	0%
沼津病院附馬医	4	2	50%
沼津病院調役組頭	1	1	100%
沼津病院調役	5	2	40%
沼津病院合計	25	7	28%
総合計	143	55	38%

※旧幕府陸軍所属の有無は「駿河表召連候家来姓名」のみに依拠

※兵学校と附属小学校との兼務者については重複分を除いて集計

離し策として、施設・備品・人員等の新政府への移管を進める。主なところを例示すれば、以下の通りである。六月、フランスから招聘した軍事顧問団が新政府に接収された（七月には解雇¹⁷）。六・七月には勘定所附抱歩兵組（元神奈川奉行支配下番）が帰宅・解兵を命じられている。七月一六日、「於其筋御請取被成下候様仕度、尤今度駿府移転仕候二付テハ、右之者共所詮抱置候余力モ無御座候間、一同暇差遣候」と述べた上、九段下・竹橋門外の仮抱小筒組四二一名、抱大砲組一五一名の移管を新政府に申請した¹⁹。歩兵・砲兵の兵卒は、徴募した庶民から成っていたが、彼らはモノと同様に政府に引き渡されたのである²⁰。八月、横浜語

学所の新政府接収が行われた²¹。九月には、フランス伝習用に使用していた軍馬二〇頭と置鞍の新政府への献納が申請された²²。なお、新政府側による兵員の取り込みには、旧幕府甲府勤番の護衛隊・護衛砲隊等への編成替え、旧神奈川奉行支配下番の一部による別手組（横浜での外国人警護を任務とする）の編成、官軍に帰順した旧幕府歩兵による帰正隊の結成、長崎奉行所付属の遊撃隊の振遠隊への改称などがあり、とりわけ江戸以外の遠隔地では独自に進行したようだ。さらに、そのものズバリ「人減らし」という言葉により兵員の削減も実施される。五月一三日付で勝海舟に宛てた服部常純・大久保一翁・平

表3 沼津兵学校資生中に占める旧幕府陸軍出身者

	総数(人)	旧陸軍	比率
第1期	5	0	0%
第2期	20	14	70%
第3期	29	22	76%
第4期	59	30	51%
第5期	14	6	43%
第6期	31	1	3%
第7期	29	1	3%
第8期	10	1	10%
第9期	21	0	0%
合計	218	75	34%

※「駿河表召連候家来姓名」のみに依拠した
※別史料から履歴が判明した17名を加えると全体では42%

岡道弘の書簡には、「陸軍方、是迄の体にては御取り続き覚束なく、さ候とて是迄の内御人減斗りにては折合いも如何。(中略) 一時役々残らず御免に相成り、その後は迄の半分も仰せつけられ然るべくと申し出候向きもこれあり⁽²⁷⁾」とあり、

陸軍兵員の半減が検討されていたことがうかがえる。そして、以下に列挙する個々の人物が残した履歴史料から、人員整理の具体的な進行状況がわかる。五月二十九日砲兵頭間宮信行「御人減二付御役御免被仰付⁽²⁸⁾」。六月一三日持田五郎次「御人減二付銃隊御免、勤仕並小普請入被命⁽²⁹⁾」。六月一九日撤兵差図役勤方寺家村邦一郎「御人減二付御役御免、勤仕並小普請入被仰付⁽³⁰⁾」。六月撤兵栗原道保「御人減二付勤向御免被仰付、同年八月小筒組被仰付⁽³¹⁾」。

人減らしは、個々人の単なる免職Ⅱ「小普請入」をもたらしただけではなく、部隊の廃止と再編成という組織全体の改変こそが要点であった。七月以降、陸軍局所属の諸部隊がどのような改編をたどったのかは、以下のような具体例から全体像をうかがい知ることができる。七月六日奥詰銃隊嚮導役初鹿野伝右衛門、御書院組を拜命⁽³²⁾。七月八日歩兵差図役頭取勤方石井至凝、小筒組差図役頭取を拜命⁽³³⁾。同日撤兵樋田邦治郎、「小筒組と唱替、御入国御供被命⁽³⁴⁾」。同日銃隊岩田健吾、「御広間組と御

唱替⁽³⁵⁾。七月一日工兵差図役頭取・改役兼勤大野鳴石、「工兵局御廃二付、大砲組差図役頭取改役兼勤被命⁽³⁶⁾」。七月撤兵、「小筒組ト御唱替ニ相成⁽³⁷⁾」。八王子の千人隊は、少数の駿河移住・朝臣希望者を除き、六月服部常純(綾雄)の名前で八六〇名余に対し「御人減二付願之通御暇⁽³⁸⁾」が下され、事実上解隊された。

【図1】は、幕府の軍事組織がどのような変遷を経て静岡藩の陸軍局に至ったかを示したものである。慶応四年七月に実施された部隊改編の結果が、点線の枠で囲み示したように、「駿河表召連候家来姓名」記載の諸部隊編成となったのである。すなわち、撤兵が小筒組、砲兵が大砲組、騎兵が馬乗、銃隊が広間組、奥詰銃隊が書院組と改称された。歩兵(兵卒)は、脱走や新政府移管などにより消え失せ、士官は小筒組に属すことになったと思われる。できたばかりの工兵は廃止された。なお、部隊の名称が、○兵・○○隊という呼称から○○組という古めかしい呼称に変わった理由はよくわからない。

【表4】は、「遠江国相良勤番組士族名簿」(六一〇名の履歴明細短冊)のうち、旧幕府陸軍局に所属した者(陸軍局ではない神奈川奉行・京都見廻組も含む)の軌跡を分類し一覧にしたものである。この表からは、慶応四年六月頃人減らしにより一旦小普請に入れられた者、一時帰農・帰商した者、脱走・抗戦・降伏を経験した帰参者など、その後勤番組に拾われた者が大多数であったことがわかる。名簿自体が、勤番組所属者(不勤者)の名簿であるためそれは当然であるが、中には、小筒組・広間組から生育方頭取支配(静岡藩陸軍局所属)となった、いわば陸軍局員として正統なルートをたどった者も若干名いた。

なお、六月段階では、それまでの陸軍奉行を陸軍頭と改称した⁽³⁹⁾ほか、「陸軍御用取扱」という役職を新設し、旧陸軍所属者以外からも有為な人材を取り込むことが行われている。六月二十七日には大築尚志・間宮信行・市川兼恭、二七日には天野貞省、同月中には乙骨太郎乙、八月八日

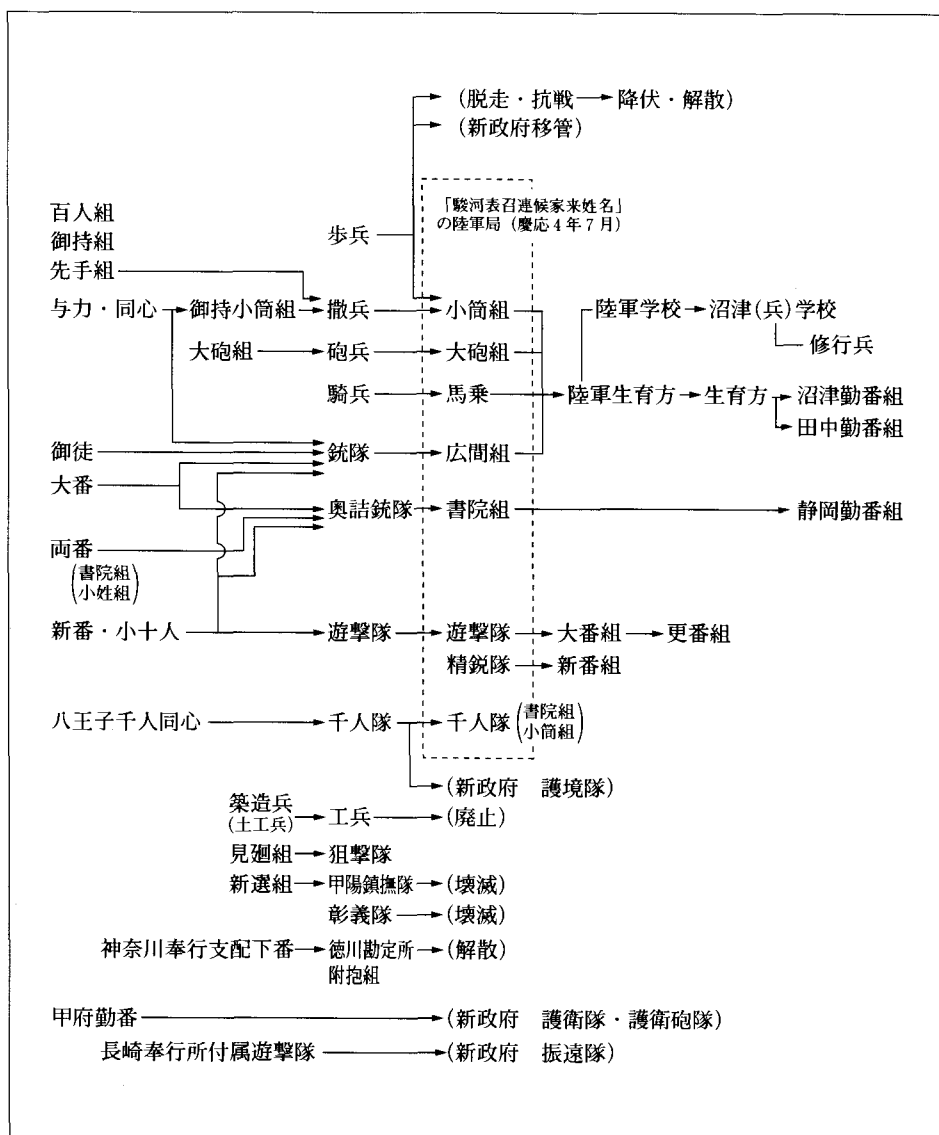


図1 幕府から静岡藩にいたる諸部隊の変遷

には江川永脩、八月中には榎本長裕・井上清相、九月九日には赤松則良、九月一五日には西周、といった具合に陸軍御用取扱が任命された。陸軍御用取扱とは、はつきりした職務は決まっていなかったものの、将来活躍が期待される優れた人材を暫定的に確保するため設けられたポストと考えられる。事実、やがて、その多くが沼津兵学校の教職員となる。

また、一〇月一六日には陸軍頭の上に陸軍総括が設置されており（服部常純・河野左門が就任）、陸軍頭は廃止され、代わって陸軍御用重立取扱が置かれた（阿部潜が就任⁴¹）。陸軍総括―陸軍御用重立取扱は、静岡藩陸軍局（後の軍事掛）の首脳部を構成したものであり、ここにおいて旧幕時代を脱した陸軍の新体制が整ったことを意味した。

こうして幕末期急速に増強された幕府陸軍は、一転して大幅な軍縮が行われ、駿河への移住者の範囲に含められたのである。その他の部局も含む移住者総員の選定は、陸軍局再編と同時に進み、七月下旬頃には「駿河表召連候家来姓名」が作成され、約五四〇〇名の徳川家臣団名簿が新政府に提出された。

陸軍局では、諸部隊の再編と移住者の選定を進めるとともに、八月（あるいは七月下旬）、移住後の大方針を「陸軍解兵御仕方書」という文書によって公示した。「兵隊を解き農二就け候規則」「学校規則」「生育方規則」「俸金定則」などから成るその内容については、ここでは詳述しないが、簡単に言えば、旧幕府陸軍局員を五〇人毎の組合単位で駿河・遠江の新領地内に土着させ、有事の際以外は農商に従事させ自活させるとともに、教育をほどこし、優

秀な人材は学校に進学させ「御役」に召し出すというものであった。これにより、旧幕府陸軍の幹部・士官・兵卒だった者は、土着して生業に従事する「生育方」所属の者と、学校の教師・生徒になる者（「学校方」とに二分されることとなった。

ここに言う「学校」が後の沼津兵学校であることは指摘するまでもないが、この「陸軍解兵御仕方（法とも）書」については、沼津兵学校設立の宣言書であると位置づける以外に、

「士族授産の先駆的形態がみられる」との評価もなされ、教育と勲業（土着・自活）とがセットで構想されていた点が注目されている。また、静岡藩全体に占める陸軍局の比重の高さから、「これまで沼津兵学校との関連において論じられてきた『陸軍解兵仕法書』は発足当初の駿府藩士構成を正面から論じた基本文書と見なさなければならぬ」との評価も

表4 「遠江国相良勤番組士族名簿」にみる旧幕府陸軍出身者の軌跡

幕府最末期	リストラ期	静岡藩時代	人数	計
歩兵	→ 小筒組	→ 帰農→勤番組	1	26
	→ 人減・小普請	→ 勤番組	12	
		→ 帰農商→勤番組	8	
	→ 彰義隊・脱走	→ 勤番組	5	
徹兵	→ 小筒組	→ 生育方頭取支配→勤番組	11	69
		→ 帰農商→勤番組	1	
	→ 人減・小普請	→ 勤番組	26	
		→ 帰農商→勤番組	18	
砲兵		→ 彰義隊・脱走	13	46
	→ 人減・小普請	→ 勤番組	29	
		→ 帰農商→勤番組	15	
	→ 彰義隊	→ 勤番組	2	
騎兵	→ 人減・小普請	→ 勤番組	2	2
銃隊	→ 広間組	→ 生育方頭取支配→勤番組	3	29
		→ 帰農→勤番組	1	
	→ 人減・小普請	→ 勤番組	18	
		→ 帰農商→勤番組	5	
奥詰銃隊	→ 彰義隊	→ 勤番組	2	19
	→ 書院組	→ 勤番組	1	
	→ 人減・小普請	→ 勤番組	11	
		→ 帰農商→勤番組	6	
遊撃隊	→ 脱走	→ 勤番組	1	10
	→ 人減・小普請	→ 勤番組	8	
		→ 帰農→勤番組	1	
精鋭隊	→ 脱走	→ 勤番組	1	4
	→ 新番組	→ 勤番組	3	
千人隊	→ 帰農	→ 勤番組	1	21
		→ 勤番組	21	
仏蘭西陸軍歩兵科伝習	→ 帰農	→ 勤番組	2	3
		→ 勤番組	1	
その他陸軍役職	→ 人減・小普請	→ 勤番組	3	4
	→ 彰義隊	→ 勤番組	1	
神奈川奉行（勘定所）附歩兵	→ 人減・小普請	→ 勤番組	3	3
京都見廻組	→ 狙撃隊→人減・小普請	→ 広間組→生育方頭取支配→勤番組	1	13
		→ 勤番組	10	
		→ 帰農→勤番組	2	
合計				249

ある。

ところで、この「陸軍解兵御仕方書」の立案者については、阿部潜であると説明されてきた。⁽⁴⁵⁾しかし、原文には発布者や起草者の名前が記されていないため、その根拠は曖昧であった。しかし、以下のごとく、他の人物の履歴資料から、阿部以外の人物の関与があったことが想像され

る。①六月一二日、歩兵頭並介立田彰信は、「陸軍御改正之御用取扱候様」、陸軍頭阿部藩より命じられた⁽⁴⁶⁾。②市川兼恭日記の七月二日条に「會計所出勤、蒙与塚本桓輔造学校規則之命」とあり、さらに四日「行會計所逢阿部日高」といった記述がある⁽⁴⁷⁾。③江原素六の略歴に、七月に「徳川藩軍制改革掛」を拝命したとある⁽⁴⁸⁾。

立田と江原は陸軍士官であり、阿部の下で制度改正の作業に加わった可能性はある。また、市川兼恭は当時陸軍御用取扱の任にあったが、もともとは洋学者であり、海軍出身の塚本明毅とともに「学校規則」の起草を依頼されたものと推測される。ただし、残念ながら、それが「陸軍解兵御仕方書」そのものであるのかどうかは断定できない⁽⁴⁹⁾。いずれにせよ、「陸軍解兵御仕方書」は、阿部個人が立案したというよりも陸軍御用取扱のメンバーによる共同作業によって成立したものと考えたほうがよいであろう。兵士の土着・自活・教育をセットにしたその内容は極めて斬新なものであり、かつて幕府陸軍の創設・増強に関与した親仏派首脳部とは全く違う頭脳が発想したものであったことを裏付けている。

この時期の陸軍局の動きで興味深いのは、海軍局への働きかけをしている点である。後年書かれた江原素六の自伝・伝記には、阿部・立田らと海軍局に赴き榎本武揚らに蝦夷地脱走を思い止まるよう説得したとあるが、立田が書き残した文書に、六月八日「品川輪泊開陽丸榎本釜次郎江談判ニ越ス」、七月一日「陸軍頭其他一同浜軍艦所江罷越シ榎本等ト訣別ス」といった記述があることから、それが単なる江原の法螺話ではなく実際にあったことであることが史料的に裏付けられた。そうなる

と、陸軍局では、海軍をも巻き込み駿河移住後の軍事体制・軍事教育を検討していた可能性があると見える。もちろん、八月一九日の榎本艦隊の品川沖脱走により、その目論見は実現しなかったが（正確には静岡藩の海軍学校設立計画は明治二年正月に断念された）。

大砲組・小筒組・馬乗とも「平常ハ陸軍頭（生育方頭取）支配（ト相唱）、兵隊二組立候節ハ（隊名相唱）、其隊之頭支配之事」とされた⁽⁵²⁾。すなわち、諸部隊に属した兵士たちは、平時には生育方頭取支配として村落で生業に従事し、有事の際には「隊名」を称し部隊を編成するとされたのである。生育方には、全体を統轄する頭取と、その下に取締、大世話方、世話方、世話役助、肝煎といった役職が置かれた。一般構成員も含め、それら役職の任命は一〇月に始まった。たとえば、一七日栗原道保、「生育方頭取支配」を命じられる⁽⁵³⁾、一八日立田彰信、陸軍生育方頭取を拝命⁽⁵⁴⁾、二〇日大野寛一、（陸軍）生育方世話役を拝命⁽⁵⁵⁾といった具合である。

なお、一二月時点の生育方の編成（全体像ではなく沼津周辺移住者のみか）を見ると、頭取（立田彰信）の下、一から一十の「類」（側）と呼ばれる土着地毎の組合に分けられていたことがわかる⁽⁵⁶⁾。旧部隊の名称は消され、生育方として一括され番号が付されたのである。この時点では、一番・二番類は「御書院組」とされているが、後述するように書院組は生育方には含まれておらず、後で計画が変更されたのかもしれない。「類」分けは、翌年の勤番組への改編後も存続したが（沼津勤番組は一〇一番類、田中勤番組は一〇一番類）、「類」とは、近世武家組織の伝統的な編制法であり、近代的な軍隊制度とは相容れないものだったといえる⁽⁵⁷⁾。

二年正月発行の役人名簿「御役名鑑」⁽⁵⁸⁾には、陸軍御用重立取扱四名、陸軍生育方頭取一名、陸軍学校頭取一名、御書院組之頭一名、大番組之頭二名、新番組之頭二名等が軍事関係の幹部職として掲載されている。当然、旧部隊たる、広間組・大砲組・小筒組・馬乗の名称は見えない。ただし、書院組だけが生育方に入らず独立した形で名前を残しているのは、陸軍学校生徒選抜において、「是迄差図役下役等の役々、三十歳以上之分者御書院組被仰付、右以下之者生徒と申者二相成」云々という

選別が行われたことに関係する。つまり、旧陸軍士官のうち、新たに設立される陸軍学校の生徒（暫定的）になることができたのは三〇歳未満の者に限られ、書院組は生徒になれない三〇歳以上の者の受け皿として残されたのである。

一方、学校方、「学校」（陸軍学校）の教授・生徒の任命も一〇月に開始された。

教授方任命は、一〇月一五日伴鉄太郎が陸軍一等教授方、久須美祐利・揖斐章が二等教授方に任命されたのを皮切りに、一〇月二日西周が陸軍学校頭取に任命されることで一段落したといえよう。⁽⁶⁰⁾

生徒の任命は、具体例を挙げれば、一〇月二〇日河津祐賢・池田保光・芳賀可伝・志村太郎ら一三名、二二日初鹿野伝右衛門・一色政次郎、二二日築山確郎、同月某日矢吹秀一・岡田正・永井当昌・中島静・大野伴三、一二月一二日鈴木長八郎といった具合である。⁽⁶¹⁾史料の上では、「陸軍生徒」もしくは「学校生徒」入りを命じられたと記されている。

生徒に選ばれたのは、先にも触れた通り、三〇歳未満の旧陸軍士官であった。人数は、『日本教育史資料』に「初メ東京ヨリ移住セシ時三十歳以下ノ陸軍士官三百余名ヲ尽ク解職シテ生徒トナシ」とあるように、⁽⁶²⁾三〇〇名余といわれるが、別の史料では四〇五〇〇名ともされている。⁽⁶³⁾

士官とは差図役並（少尉）以上であり、差図役下役（曹長）以下の下士官は入らないはずであるが、先に紹介した書簡には「差図役下役等」とあり、実際には線引きがどの階級でなされたのか不明確である。いずれにせよ、数百名が一挙に採用され、正規な生徒（資養生）になるべき試験を受けるため暫定的な教育が施されたのである。生徒の選抜について伝える一一月四日付藩士書簡では、「三術之中を勉強いたし、十ヶ月之内ニ右学業上達之者者、夫々御役を蒙り、十ヶ月過而も同様之人物者兵士ニ落入候様なる御規則ニ相成⁽⁶⁴⁾」とあり、暫定教育期間は一〇箇月を想定していたらしい。

ところで、一〇月の御書院組之頭衆宛達によれば、「此度陸軍学校御取建相成に付其方共組並役々並兵士共生年三拾歳以下之者何れも生徒入被命候間其段可被申渡候」とあり、書院組の場合は、役々（士官）のみならず、兵士（平士）も生徒入りの対象となったことがわかる。三〇歳という年齢制限もあり、御書院組三番小隊の場合、四六名中二五名が生徒入りを命じられている⁽⁶⁵⁾（ちなみに、うち一名三田信のみが後に資養生に及第した）。同じ一〇月の御書院組之頭衆宛陸軍頭布告には、「陸軍局役々之儀は既に門閥之高卑、子弟厄介之無差別、一術一能之者御撰挙相成居候処、先般御人減し之節、右之内より再度御撰挙之儀に候得ば、弥格別之人物に相違有之間敷候（中略）来十一月迄之内夫々研究致す学科之高卑に寄り相応之御拔挙可有之、乍併右月数相立候ても当人之不勉強より一術を得ざる者は不得止、生徒脱籍可致間、兼而此段布告に及候但御書院組之儀は是迄之門閥も有之候儀に付、格別之訳を以て生徒入被命、嚮導役並之俸金被下候にて可有之候事⁽⁶⁶⁾」とあり、幕末期の人材登用（第一次選抜）、慶応四年六月の「御人減し」（第二次選抜）、そして今回の生徒採用（第三次選抜）により、陸軍局では相当な人材選り抜きが進んだとしている一方、書院組は従来の「門閥」としての立場を考慮され、「格別之訳を以て生徒入被命」という、特別扱いが適用されたことがわかる。両番・大番など中級旗本から編成された奥詰銃隊の後身たる書院組の場合、その家柄からする特権を一気に廃止するわけにはいかなかったのである。

一二月、西周が起草した「徳川家兵学校提書」「徳川家兵学校附属小学校提書」が公布され、「陸軍解兵御仕方書」では不明瞭だった陸軍学校（沼津兵学校）の詳細な規則が定まった。逆に、五〇人ずつの組合單位での在郷教育計画は立ち消えになったと思われる。翌明治二年四月から資養生選抜試験が実施され、暫定生徒数百名の中から正規の生徒たる資養生とそうでない者とがふい分けされていく（第四次選抜といえよ

うか)。資養生に及第しなかった者は、生徒を免ぜられ、学校を離れ生育方頭取支配に編入されていった。⁽⁶⁷⁾ただし、「辰年十二月以後生徒入を命ぜられたる輩には資養生同様の俸金を賜はりしが明治三年春に至て止められ⁽⁶⁸⁾」と記した文献があることから、暫定的な意味の「生徒」という存在は明治三年（一八七〇）春まで存続したことがわかる。三年発行「静岡御役人附」の沼津兵学校の箇所に、資養生とは別に単なる「生徒」一五名が掲載されているのは、その残留者と考えられる。⁽⁶⁹⁾

本節の最後に、生育方の終焉について述べておきたい。在郷軍人制度ともいべき生育方は、明治二年九月に廃止された。所属者の履歴史料上でも、二年九月六日「生育方御廃止ニ付頭取支配御免、沼津勤番組之頭支配三等勤番組被命候⁽⁷⁰⁾」といったように記されている。旧陸軍の不勤者集団たる生育方は、勤番組と改称したのである。正確に言えば、陸軍局員以外の一般藩士の不勤者を統轄すべく編成された勤番組は、明治元年段階から存在し、小島・静岡・掛川・相良・横須賀・浜松・新居といった藩内各所に置かれていたが、陸軍局員のみが集住した沼津・田中には置かれていなかった。ところが、旧陸軍局員とそれ以外との区別がなくなる形で生育方が廃止され、その代わりに沼津・田中にも勤番組が新設されたということである。

書院組所属者の履歴には、八月二三日「御廃止ニ付二等勤番組被命⁽⁷¹⁾」とあり、ほぼ同時に書院組も廃止されたことがわかる。また、九月には、知事からの直接の達として、「御直諭 此度知事様蒙命候ニ付而者別而此藩相当之武備相立度、是迄兵制之儀者夫々変革も有之候得共兎角各種ニ相分り居、一定の場合ニも至り難ク御一新之折柄旧習ニ泥之候様ニ而者不宜義ニ付、追而朝廷之兵制を相伺、右を標準と致シ一般ニ可合迄者武官之者共役向一先差免、再撰拳二者可致、右者生育方役々も同様之義ニ付銘々趣意取違不平等之様厚ク相心得可申候、就而者兼而取扱来り候御用向者無遺漏取調、更ニ下令相待候様有之度候 右之段役々厚説諭ニ

及候様致度事 知事 服部綾雄殿⁽⁷²⁾とあり、生育方の廃止と「武官」の一斉差免がセットで行われたことがわかる。その改革の目的は、新政府の兵制を標準とした藩の軍制統一化であり、言外に沼津兵学校が輩出する士官のみを藩軍事組織の担い手とすべきだとする意志が含まれていたといえよう。しかし、不平を抑え、厚く説諭を加えるように述べているごとく、職を失った武官・兵士の中には不満が渦巻いていたことが推測される。「武官」とは、主として、生育方に含まれることなく独立し、頭・頭並・頭取・差図役・差図役下役・嚮導役といった階級を持ち、六箇小隊から成り駿府城の城門警備などにあたっていた書院組のことを指していると思われる。書院組内部では改編に対する不満から集会が開かれたという⁽⁷³⁾。武官・兵士であることの最低限の証明であった生育方・書院組の組織・名称が廃止されたことで、彼らは単なる一般無役藩士と同列とされたわけであり、武職にこだわる者にとっては耐え難い仕打ちであった。反発に配慮してか、それとも後述する修行兵取り立てとの関連においてか、二年十一月、勤番組之頭・同並は「軍事掛権大参事支配たべく候間右差図ヲ受可被相勤候⁽⁷⁴⁾」という達が出されており、勤番組自体が軍事掛の管轄下に入ることになり、内実はともあれ勤番組は軍事組織としての位置づけを得た。

なお、陸軍局に属さなかった部隊についても、大番組（元遊撃隊）は二年二月までに更番組と改称して三年八月には勤番組へ編入、新番組（元精鋭隊）は二年七月に開墾方に改組する⁽⁷⁵⁾など、解体が進行した。

明治二年九月生育方の廃止は、幕府陸軍解体の最終到達点であった。以後、静岡藩では、沼津兵学校という教育機関を唯一の基盤として軍事体制が構想されていくのである。

③ 沼津兵学校付修行兵と静岡藩における常備兵の不在

明治二年秋、生育方の廃止とほぼ同時に、版籍奉還や職員令など政府の指令にもとづき、全国的な藩制改革が実施された結果、静岡藩では陸軍局は軍事掛と変わり、陸軍総括・陸軍御用重立取扱といった幹部たちは権大参事・少参事という新しい役名に変わった。

前節で述べたごとく、生育方廃止は、軍事関係の部署は沼津兵学校とその上部組織たる軍事掛のみに限定するという、いわば藩軍事組織の究極のスリム化であった。ところが、その直後、明治政府から静岡藩に対し常備兵三〇〇〇名を備え置けという命令が出された。⁷⁶⁾

折角の軍縮路線に逆行する政府の命令に対し、静岡藩ではとりあえず下記のような方針を決めた。二年一〇月二三日、「来春学校附修行兵御取建相成右兵隊諸科教導之義学校教授方之内併資業生交番に而可致為附積」⁷⁷⁾。つまり、明治三年春に沼津兵学校附の「修行兵」という兵隊を取り立てることを決定したのである。修行兵の訓練・教育には兵学校の教授・資業生が交代であつたこととされた。翌日、一〇月二三日には一等教授方大築尚志が「兵学校俗務御用重立取扱」を命じられており、彼が修行兵取り立ての担当者になったことがわかる。

また、同月中には、学校の名称を元通り「兵学校」とすべき達⁷⁸⁾が出され、同年三月一日の布告以来「陸軍学校」から単なる「学校」「沼津学校」と改称していたものを旧に復し、軍学校であることを明確にした。西周は沼津兵学校を単なる軍学校ではなく、文官をも養成する藩の総合大学にしたいと考え、「追加提書」を起草していたが、その目論見は政府の常備兵設置命令の影響で実現不可能になったといえる。

一月八日勤番組之頭・頭並に対し、「勤番組之内よりも御撰、兵隊御編成可有之筈二候、夫迄之処ハ勤番組何れも各所割当之地ニ於て文武

之道ニ勉勵いたし、其余暇稼穡之業を相當ミ、浮薄之弊を去り、質直之士風ニ導き候様可被致候⁸⁰⁾」という達が発せられた。次いで同月二九日には、「各所勤番組之内より強壯之者相撰み兵学校え為修行先百五十人為差出追々卒業之上交代為致候筈に候右人撰方之義は兵学校教授方各所へ出張勤番組組頭へ申談相撰候様可致候⁸¹⁾」という達が出ている。修行兵は勤番組の中から一五〇人ずつ選び兵学校へ送り出し、順次交代させていくというものである。先には、生育方の廃止によって、軍事からは切り離されたはずの不勤者集団が、今度は、兵士の供給源として位置づけられたのである。それも、旧陸軍局員を中心とした沼津・田中の二勤番組のみならず、藩内すべての勤番組が対象とされたのである。⁸²⁾

同じく十一月、小島勤番組では、「各今日之職務ハ既ニ軍事ニ関係シ万一之節者鋒鏑之中をも互ひニ扶助いたし合候儀ニ付、銘々當日之等級元禄之多寡等□□無挾処、都而現今之職務ニ抛り戮力同心平素之勤向肝要二候、隊伍者伍長ニ譲り伍長ハ世話役ニ譲り世話役ハ頭取と相互ニ陸合、今日之階級不亂様有之度事(中略)右之通相心得、都而局中不敬ニ不涉様可致候事⁸³⁾」という趣旨が回達されており、軍事組織としての自覚と規律の引き締めが図られている。

二年一二月には兵学校三等教授方平岡芋作が修行兵取立方に任ぜられ、同月一日には資業生永峰秀樹ら四〇名が修行兵仕込方手伝を命じられた(ただし、三年一〇月時点では実地仕込方にあつては一二一三名にすぎなかったという)。⁸⁴⁾

修行兵のその後に關しては、以下のような動向が各種史料・文献から判明する。三年(一八七〇)五月一三日、沼津勤番組に出された布達に、「以急廻状致啓上候、然者明後十五日第二字御城内訓練場一同相揃、訓練稽古之心得ヲ以、御出勤相成候様御心得可被成候、且服之義者必訓練服と相極り不申候間、戎服ニ而も股引半天ニ而も銘々勝手次第と御心得可被成候 十三日 若病氣之面々者印紙断状右刻限迄ニ差越掛り役

所江御差出可被成候 五月 兵学校附修行兵人員（五九名氏名省略） 惣員五拾貳人⁽⁸⁵⁾へ」といった文面があり、実際に沼津城内の訓練場で訓練が実施されたことがわかる。ただし、揃いの軍服はなかったようだ。履歴書によると、軍事掛附属栗原道保は、三年六月二一日

「兵学校附修行兵被命、同四年四月依願修業兵御免、沼津兵学校附属被命⁽⁸⁶⁾」という経歴をたどっており、中途で辞めたのかどうかはわからないが、兵役期間が一年に満たなかったことがわかる。沼津勤番組十一番類に属した太田昇蔵は、三年六月修行兵を命じられた際、「十一番類三番太田昇蔵 右兵学校付修行兵被命候二付当類除名相成候間此段御達申候⁽⁸⁷⁾」という辞令を受けており、修行兵任期中は勤番組を除名されたことがわかる。同年七月一七日、「右は直様寄宿人にも相成候程の儀に付家族一同引移候儀は見合せ当人のみ出張致し候儀と相心得⁽⁸⁸⁾」という布達が出されており、各所勤番組より人選の沼津兵学校附修行兵は单身寄宿舎に入れられ、家族ぐるみ沼津へ移住し自宅で同居するといったことは禁止されたことがわかる。一方、三年九月沼津勤番組に発せられた達は、「此度訓練相始候二付而者勤番組一同、尤老幼之者者相除、当主并子弟厄介二至迄稽古可被致候、且老幼之内にても有志之者者罷出候而も不苦候旨、且又名前早々取調差出候様御達二付相達候段、且戎服無之分者平服にて不苦旨、日限者追而被聞候由、○老幼之訳者五十才以下十五才以上之事二御座候由⁽⁸⁹⁾」というものであり、沼津近在に住居している者に対しては、修行兵という肩書が付されたかどうかは別に、老人や少年にも対象を広げ訓練を実施しようとしたことがわかる。

資業生が修行兵の教育・訓練に果たした役割は大きかったようである。三年九月五日、一等教授方大築尚志は資業生に対し、「近々学校附兵隊組立」につき朝夕二度操練実施すべきという達を発している⁽⁹⁰⁾。四年（一八七二）四月、資業生屯所掛に対し修行兵仕込方骨折りにつき白綾木綿下賜され、古川宣登ら七名に対して金五両下賜された⁽⁹¹⁾。古川の履歴では、

四月修行兵仕込方出精の旨により白綾木綿一反下賜、一二月修行兵仕込方骨折且又其他共精勤の旨にて金五両下賜となつてゐる⁽⁹²⁾。当時作成された資業生の名簿には、「兵士持 長峯矯四郎」（以下二名氏名略）、「修業兵算術教師助 市川嘉一郎」、「資業兵算術教師助 市川嘉一郎」、「八月改メ取建人共都合士官四十六人、内兵士持十人と成」、「体操 大坂行別所貫一、資業兵方 福島邦太郎」といった記載が見られ、資業生のうち選ばれた者は、「兵士持」という名目で修行兵の教育を担当し、また訓練のみならず、算術・体操など特定教科を専門に教えた者もいたことがうかがえる。

修行兵になった者には、三年一〇月一九日学校附属出役（兵学校附属喇叭手出役）から「兵学校附属修業兵被命⁽⁹³⁾」という戸張胤邦もそうであるが、先に登場した栗原道保・太田昇蔵と同様、軍事掛内部の他役や兵学校近隣の沼津勤番組管内から転じた者が少なくないようだ。

しかし、修行兵の地位は藩内では低く見られたようで、四年七月頃浜松勤番組から沼津へ転じた岡本昆石は、「予が今から英学を修業するは晩学である寧ろ当地の資業兵となつて鉄砲をかついだ方が宜からうと云ふから予は心裡に憤慨して汝等何を知つて痴言を吐く歟、予遙々当地へ来たのは英学を修業せんが為めである⁽⁹⁴⁾」云々と回想記に述べており、学問の道を志し理想を高く持つ青年にとっては避けるべき就職先であった。最終的に修行兵の総数がどれくらいに達したのかは不明である。しかし、三〇〇〇人の常備兵を置けという明治政府の命令が、この修行兵制度採用によつて達成されたとは思えない。後年、資業生石橋絢彦は、「修行兵を置きたる趣意は之を練りて下士官に充て兵学校より上士官を得んとするに在りて最初元小筒組にて沼津及近在移住の者より五七十人強壯なるものを選び修行兵を命じ小山弥吉なる者其の隊長に挙げられ資業生の古参者其仕込方に当れり⁽⁹⁵⁾」と述べており、修行兵が単なる兵卒ではなく下士官候補であったとしている。石橋の修行兵「下士官説は、静

岡藩が明治四年四月一四日の兵部省達を受け、五月一日沼津三等勤番組・兵学校資業生一七名、沼津二等勤番組・兵学校資業生三名、七月一日沼津三等勤番組・兵学校資業生七名を選抜し、大坂の教導隊へ生徒として派遣している事実が裏付けとなる。この二七名の「資業生」というのは、列記された氏名から判断しても、兵学校資業生のことではなく、「修行兵」の書き誤りであることは明らかである。先に紹介した史料にも、「修行兵」「資業兵」「修業兵」と書き方がまちまちであり、当時の人々も間違えやすかったのであろう。大坂の教導隊は新政府の下士官養成機関であり、そこに派遣されたのが修行兵であつたということは、藩内における修行兵の役割も下士官候補者であつたことを証明しているといえよう。

そうすると、静岡藩は、修行兵という名の下士官候補を採用することでお茶を濁し、三〇〇〇人の常備兵設置という政府命令をまともに守らなかつたと言えそうである。何故、政府の命令を無視するといったことをしたのであろうか。その答えは、以下に引用する江原素六の回想記にある。

朝廷からは三千人の歩兵、即ち士族の兵を拵へろと云ふ御沙汰でございまして、夫れが為め十八万円の定額金があつたのです。(中略)兵は些つとも養成しませんで、専ら教育に力を尽し、軍隊養成費を割いて教育費に充てましたが、さしあたり其金は一万有余で沢山でありましたから、その剰余金を以て二つの事業を興したのです⁽⁹⁷⁾

朝廷からは三千人の兵を養成せよと云はれたのである。所が阿部並に私などの意見では、何うしても藩と云ふようなものを今後永く存置するやうでは日本の前途はいけない。是非共、廢藩置県、郡県にならなければならぬのである。又必ずさうなるだらう、然らば暫時の間の命脈に対して兵などを養成した処が、その兵の出来あがる時分にはその

兵を廢してしまはねばならぬのである、と云ふ考へでありました。その時代には不生産と云ふやうな言葉がなかつたのですが、兎に角、益もなく、多くの金を費すから、それよりは唯、中等以上の智識を与へる方が宜いと云ふ考へで、主にその方へ力を尽して居りました。所が兵を組織することになれば、その士官となつて給金も取れるし、相当の地位を得られると云ふ所から、パンに餓えて居つた人々は兵隊熱を振廻して屢々藩庁に迫つたのである⁽⁹⁸⁾

江原や阿部は、廢藩置県は時間の問題であり、いくら個別の藩が軍備に力を入れても無駄になることを知っていたといふのである。兵隊を擁するよりも、中等以上の教育や殖産興業に金を費やしたほうが将来のためになるという見識を有していたといふことである。遙か後年の回想録の言葉をそのまま鵜呑みにしてしまつてよいのかどうか、危うい点もある。しかし、決して全くの嘘ではなかつたと考えられる。

明治三年八月、軍事俗務方頭取中川虎一郎以下二五名は藩当局に対し、「付而者軍局之儀未兵隊御取立之期二も至り兼、随而俗務暫閑暇之折柄、過分之御宛行頂戴安居罷在候も平素之心志二も相払り悲愧仕候儀二御座候間、私共一同俸金之儀者奉還仕、乍聊右之御冗費二被為宛被下置候様仕度、依而御役御免奉願候、尤往々兵隊御取立俗務御用向も御座候節二臨ミ候ハ、御人撰を以如何様共相応之御役被命候得者難有奉存候⁽⁹⁹⁾」と、免職願を提出している。軍事掛の職員である中川らは、江原・阿部らの部下であつたが、一向に兵隊が取り立てられないため、仕事がなく暇であり、免職してくれといふのである。この事実からも、すでに実施されていた修行兵取り立てが、彼らの言う兵隊取り立てには当たらないものであつたことがわかる。

同じ軍事掛内部でも兵隊取り立てを行わないことに対する不満がくすぶっていたらしいが、江原・阿部らが、どのような思想的背景をもつて、

兵隊不要という強固な信念を抱くに至ったのかはよくわからない。三年八月兵学校の政府移管の可能性が示唆され、九月には実際に移管願いが提出されるなど、先見の明に富んだ動きもあり、西周が後に徴兵制確立に果たした役割を考えると、彼の主導性が想定されるが、兵隊不要が「陸軍解兵御仕方書」以来の一貫した方針だったとすれば、西より先に阿部・江原らの基本理念があった可能性が高い。

明治元年一〇月二三日段階で、藩内より織田和泉宛に、「是迄銃隊訓練可也覚候者も、多ハ脱走等ニテ、今ハ一向ニ無之、若年輩練武相廃候後、愈柔弱ニ而已相成候ニ付（中略）稽古為始候積ニ候、然ニ前蘭仏二流為学候得共（中略）朝廷ニテ御用之方為学度存候（中略）軍事方衆え御序之節、御聞繕御申越有之候様致度存候（後略）」といった依頼が出されており、練武の機会がなくなったことを惜しみ、軍事訓練の実施を求める声があったことがわかる。同年一月一〇日には、政府より箱館の榎本武揚軍討伐のため二大隊を派兵するよう命令が下っており（後中止）、元年段階においては実際に軍備を全廃することはできない情勢にあった。

旧陸軍集住地の沼津からは遠く離れた浜松では、たぶん明治二年前半期までは、「小銃を船廻しになし所有せしに付、仏式伝習を受けたる山口朴郎外一人を自費にて雇ひ、浜松旧城明き地を拝借し、稽古日を定め、小隊運動或は隊操・角打等をなす」といったことが行われており、陸軍局による正規な行為ではなく、私的な形で軍事訓練が行われていたらしい。その兵力は、二年一月浜松近辺の農民一揆鎮圧に効果を発揮した。しかし、阿部・江原らを指導部とする陸軍局―軍事掛は、決して全面的な「再軍備」を実行に移すことはなかった。二年九月の政府密偵の報告書にも、「練兵ハ沼津ニテ少々有之、外ハ一円無之候、但シ仏式ニ御座候」とあり、兵学校での訓練以外に、その後藩内では軍事訓練が行われることはなかった。「駿府藩―静岡藩の軍事力は、結局潜在的なもの

にとどまったが、それでも人民に対する支配には事を欠くことはなかった」のである。徳川家の入封以前に存在した、葦山代官が取り立てた農兵（原宿・大宮町・江尻宿の小隊）や駿河・遠江に領地を有した大名・旗本が採用した農兵なども、静岡藩では全く顧みられることはなく、自然消滅したものと思われる。

三年六月一二日沼津城二重櫓の火災があった。この火災について兵学校教授が書き残した、「土手の上に櫓あり、此の中に小銃三千挺、付属品など入れ之れ有り、沼津陸軍三千人の大切の小銃にて、両三日前手入れも済ませしに、如何なる原因にて発火せしか」という記述からは、沼津には三〇〇〇人分の小銃があったことがわかり、政府の常備兵設置命令に応じるための準備がされていたとも考えられる。しかし、それはそもそも「駿河表召連候家来姓名」に掲載された陸軍局員の人数が約三三〇〇人だったことに対応するものと考えられない。三〇〇〇挺の鉄砲は、ほとんど利用されることなく焼失したのであろう。

ハード面における幕府陸軍の遺産の多くは、新政府に引き渡し江戸に置いてきたわけであり、一部の書籍・印刷器械などを除き静岡に運ばれたものは決して多くない。沼津兵学校の校舎は、沼津藩の沼津城御殿を転用したものであり、学校として整えられた施設だったとはいえない。兵器については先に少し触れたが、三〇〇〇挺の小銃の種類は不明である。「操練用として貸渡された小銃（ゲベルという旧式の先込め銃）をもつて獵を行った。鉛で散弾を自製した」という資養生の回想もあり、どうやら最新式のものではなかったらしい。軍装についても、「全体生徒に対し一定の制服なく袴羽織を禁ぜられ窄袖なれば何にても宜しといふ掟ゆゑ銘々随意の服装を為したり生兵の時は制服なくとも余り見苦しからず隊伍を組み運動する時に制服なきは見苦しきものなれど其節は左程にも思はざりし」と資養生が回想しており、揃いの軍服が作製・支給された形跡はない。

沼津兵学校では教科書を発行した。兵書として、『野戦要務』（明治二年刊、大鳥圭介訳・慶応元年陸軍所版の復刻）、『兵学程式』（三年三月刊、慶応三年陸軍所版の復刻）、『仏蘭西歩兵程式』（三年刊、大鳥圭一郎訳『仏国陣営条規』を刊行しようとした事実もあり、かなり活発な出版を行ったといえるが、同時期に刊行した英語・フランス語・数学の教科書と比べると兵書の現存数は極めて少なく、印刷部数が少量だったのではないかと推測される。

教授陣の人材の豊富さとは対照的に、ハード面において軍学校として沼津兵学校は決して恵まれていなかったといえる。しかし、それも、軍備は一先ず置いて一般教育（普通教育）こそを優先しようとする、阿部・江原らの考え方が反映された結果だったのではないだろうか。

おわりに

沼津兵学校が、幕府軍制改革の最終点であったことに間違いはないが、西周の「追加掟書」構想に表れたごとく、武官のみならず文官をも含めた藩官僚の養成を射程に入れていたという意味において、非軍事分野での洋学摂取政策の帰結点でもあった。従って、洋学教育機関としての性格が濃厚で、陸軍士官学校としては純度が高くなかった。また、阿部・江原らの持論により、常備兵が不要とされたことは、維新の敗者たる静岡藩・徳川家の政治的立場とも相俟って、諸藩と比較し極めて特異な藩内事情となっていた。兵員の不在は、藩制機構の中で軍事部門の役割が極めて限定されたことを意味し、静岡藩軍事掛の機能は、沼津兵学校の経営だけを主要内容とし、士官の養成・教育に高度に特化するものとなった。そのため、和歌山藩が断行した徴兵制のごとき、旧幕時代を超える軍制全般での新政策を打ち出しえなかったといえよう。以上の点は、

制度・規模ともに全国諸藩をはるかに引き離していた旧幕府陸軍と、静岡藩との断絶面を最もよく表している。

その一方、系譜上、静岡藩の陸軍局・生育方・軍事掛・勤番組等が幕府陸軍の部分的後継者であったことも疑いのない事実である。教育機関としては最高度の制度・内容を誇った沼津兵学校も、阿部・江原・西らの独創のみから生まれたものではなく、大きな視点よりすれば幕末の陸軍諸改革の延長上に位置づけられるのである。

ただし、沼津兵学校の歴史的意義を考える場合、狭義の軍事的視点では不十分である。教育を通じて行われた「武士」身分の解体という社会的な変革こそが、沼津兵学校をめぐる人的な動きの本質であった。藩という枠を越えるものではなく、庶民への窓も閉ざされ、なおかつ三年半という短期間では途中経過しか示せなかったものの、幕府時代の家禄・家格・役職等を見ない当時においては、「国民国家を経営するためのプロフェッショナル」「郡県の武士」⁽¹³⁾（陸軍士官）はその一部）を創出するために、最も制度的・組織的に整えられた教育機関の姿だったといえる。

軍事組織としての兵学校の掟書には、厳格な規律・統制を求める条文が当然のように盛り込まれていたが、一方において、生育方に対して出された布達には、「今般陸軍局御変正相成（中略）銘々不体之廉又ハ御為筋二不相成と見込候義も可有之、右等之義者其筋を以可申出者必定二候得共、乍然順序を以申出兼候場合有之、随而士情抗塞致候而ハ不相成候間、追而訴所御取建二相成候迄、阿部邦之助・藤沢長太郎・江原三介・立田政吉郎、右訴を□□候間、聊不軽忌憚末二至迄無遠慮罷出可申出候事辰十一月 村落懸り取締江⁽¹⁴⁾」という、建白・意見を奨励するものがあつた。また、江原素六には、「私の隊に属して居る者からも、色々の建白書が出ます。外の者は些とも之を見ない、鼻でも拭いてしまつたのです

が、私は一つ残らず、部下から、出た建白書を丁寧に読みました。その読んだ中でも古川善次郎と云ふ下士官が出したものは、色々善い(中略)私は立所にその人を少尉に抜擢しました⁽¹⁰⁾という、幕府士官時代の京都滞在中の逸話がある。つまり、阿部・江原らには、個人の意志や意見を尊重しようとする姿勢が濃厚にあった。それは、硬直した封建制度・身分制度とは対極に位置する立場であり、能力主義や平等性こそが、近代

註

- (1) 熊澤徹「幕末の軍制改革と兵賦徴発」(『歴史評論』第四九九号、一九九一年、同「幕府軍制改革の展開と挫折」(『シリーズ日本近現代史』I、一九九三年、岩波書店)、同「幕末維新期の軍事と徴兵」(『歴史学研究』第六五一号、一九九三年)、同「慶応軍役令と歩卒徴発―幕府組合銃隊一件―」(『歴史評論』第五八号、一九九八年)など、一連の研究。
- (2) 松下芳男「改訂明治軍制史論(上)」(一九七八年、国書刊行会、元版一九五六年)は、沼津兵学校について言及した数少ない通史である。羽場俊秀「沼津兵学校および同校附属小学校の設立について」(『軍事史学』17-3、一九八一年)は、「軍事教育の観点」から考察することを意図したというが、その意図は実現されていない。
- (3) 和歌山藩の徴兵制に関する近年の研究成果には、山田千秋「日本軍制の起源とドイツ」(一九九六年、原書房)がある。
- (4) 江原は、講武所以来の陸軍士官であり、駿河移封直前には撒兵頭となっていたが、決して陸軍首脳部には位置しなかった。阿部は、文久期に両番格騎兵差図役勤方に就いたという前歴はあるが(『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第一巻、一九九二年、三一書房、四三頁、文久二年四月五日)、幕府瓦解後に目付・公議所御用取扱に就任するなど、陸軍との関係は薄かった。ただし、阿部は、慶応三年(一八六七)一二月集議所の開設や幕府・諸藩の軍制統一を建白した伴門五郎・本多晋・須永伝蔵ら、後に彰義隊結成の中心となるグループと密接な立場にあり(原口清「明治前期地方政治史研究 上」、一九七二年、塙書房、二六―二七頁)、軍制改革について独自の見識・主張を持っていた可能性がある。
- (5) 石橋純彦「沼津兵学校沿革(一)」(『同方会誌』三十八、一九一五年、復刻版合本第六巻、一九七八年、立体社)。
- (6) 江原素六述「急がば廻れ」(一九一八年、東亜堂書房、三七七―三七九頁)。
- (7) 江原先生伝記編集委員会・結城礼一郎「江原素六先生伝」(一九二三年、三主社、上篇一三六頁)。
- (8) 静岡県駿東郡役所編「静岡県駿東郡誌」(一九一六年、一九七二年復刻、長倉書店、五六〇頁)、沼津市誌編集委員会編「沼津市誌」下巻(一九五八年、沼津市、一七頁)、三枝康高「静岡藩始末」(一九七五年、新人物往来社、一九五頁)、永原慶二・海野福寿編「図説静岡県の歴史」(一九八七年、河出書房新社、二二二頁)、仲田正之編「街道の日本史22伊豆と黒潮の道」(二〇〇一年、吉川弘文館、二〇三頁)など。
- (9) 宮崎ふみ子「幕府の三兵士官学校設立をめぐる一考察」『年報・近代日本研究 三 幕末・維新の日本』(一九八一年、山川出版社)。
- (10) なお、親仏派の幕府陸軍首脳の一入であった藤沢次謙は、静岡藩でも少参事・軍事掛として沼津兵学校の幹部となっていたが、江原や阿部のように学校設立計画には関与していなかったようで、元知行所の者にあてた一月四日付の手紙で、思いもよらず陸軍御用重立取扱に任命され沼津に移住することになった旨を知らせている(安西愈「勝海舟の参謀 藤沢志摩守」、一九七四年、新人物往来社、一五五頁)。藤沢は、勝海舟の勧めにより後から引き込まれたらしい。
- (11) 国立公文書館所蔵。静岡県立中央図書館でもマイクロフィルムで閲覧可能。
- (12) 石橋純彦「沼津兵学校沿革(五)」(『同方会誌』四十二、一九一六年、復刻合本第七巻、一九七八年、立体社)。
- (13) 三兵士官学校の生徒との比較・対照は、「兵術語学伝習事件」(東京大学史料

的な教育制度、ひいては組織一般にとつて、不可欠の前提として意識されていたことを意味しているのではないだろうか。⁽¹¹⁾そんな点も含め、幕府陸軍の改革は、沼津兵学校に行き着くことで、これから始まる国家・社会の全面的変革を予告する、最先端の様相を提示して見せたのである。

編纂所蔵)によった。

(14) 「遠江国相良勤番組士族名簿」(相良町郷土資料館所蔵)。

(15) 黒板勝美編『新訂増補国史体系 第五十二巻 続徳川実紀 第五篇』(一九三六年、国史大系刊行会)、幕府陸軍の役職者を収録した東京大学史料編纂所編『大日本近世史料 柳宮補任 五』(一九六五年、東京大学出版会)、勝海舟『陸軍歴史』(勝部真長他編『勝海舟全集17(陸軍歴史Ⅲ)』、一九七七年、勁草書房)は、いずれも慶応四年四月までの記録しか収録されておらず、それ以降の徳川家・静岡藩の動向を示す史料は対象外とされたようだ。

(16) 信太歌之助の総房鎮静方取締としての廻村については前掲『続徳川実紀』(三九八頁)や市立市川歴史博物館『幕末の市川』(二〇〇三年、四五頁)、江川永脩の武蔵下総阿国軍事掛鎮静方頭取締については拙稿『沼津兵学校関係人物履歴集成 その二』(沼津市博物館紀要) 27、二〇〇三年、乙骨太郎乙の歩兵差図役格軍事掛附就任については辞令(沼津市明治史料館所蔵・乙骨太郎乙関係文書B-18・19)、中根淑の軍事掛附任命について田中明『中根香亭先生年譜』(一九九六年、私家版)、土屋氏貴の軍事掛任命と江戸府下での鎮撫活動について山田万作編『岳陽名士伝』(二八九年、一九八五年復刻、長倉書店、一一九頁)、阿部潜の房総鎮静方としての活動は『復古記』第十冊(一九二九年、内外書籍株式会社、九二二頁)、松平太郎の派遣については、『続徳川実紀』(四二八頁)によったほか、『海舟日記』にも関連記事が見える。この軍事掛附や鎮静方といった職務に就いた者には、剣客や洋学者などが混在し、必ずしも陸軍関係者に限定されておらず、勝海舟の独自の人選によったものだった。江川永脩・松波権之丞らの房総での活動と勝の意図については、山形絃『市川・船橋戦争』(一九八三年、尚書房)、同『新撰組流山始末』(一九八一年増補版、尚書房)でも考察されている。

(17) 倉沢剛『幕末教育史の研究 二』(一九八四年、三五八―三五九頁)。

(18) 『復古記』第十冊、三七九―三八五頁、白野仁『白野夏雲』(一九八四年、北海道出版企画センター)、七九頁。

(19) 『復古記』第十冊、二六四―二六五頁。

(20) 幕府陸軍の歩兵について述べた野口武彦『幕府歩兵隊』(中公新書、二〇〇二年)は、脱走し奥羽・箱館を華々しく転戦した歩兵たちのその後を描いているが、新政府に仕えることになった旧幕府歩兵のその後については言及していない。たとえば、東多摩郡堀之内村平民宗寿長男に生まれた大石義正のような、明治元年二月二五日「西城下屯江兵員二被召抱」↓三月五日小頭↓七月一〇日嚮導試補↓一九日竹橋内屯所・嚮導役↓三年六月一七日辰ノ口屯所編入↓四年九月一四日四等軍曹↓五年三月二一日陸軍二等軍曹↓一〇月七日陸軍一等軍曹

↓六年九月三日仙台鎮台付↓七年二月九日満役↓二年私学開業(『東京府教育史資料体系』三巻、一九七二年、東京都立教育研究所、六八六頁)、といった経歴をたどった歩兵が存在したことも見落とせない事実である。慶応四年四月、いかなる理由か紀州藩預かりになっていた旧幕府歩兵一名は、連名で政府軍への編入志願書を出し、許可されている(『復古記』第十冊、七二―七三頁)。また、脱走した歩兵であっても、品川宿桶職徒弟↓第六連隊第二大隊一番中隊一番小隊歩兵・太鼓組↓脱走し上州築田・会津で抗戦↓仙台で降伏↓東京で謹慎・赦免↓親兵二年間勤務↓釣針職人↓遠州金谷宿移住・職工という、成瀬常吉の履歴(高室梅室『静岡県現住者人物一覽』、一八九七年)は戦後の生き様を記録したものとして珍らしい。なお、梅沢有久(伝吉)のように、上野国邑楽郡大曲村百姓伝左衛門弟として御料所歩兵に取り立てられた身ながら、フランス伝習↓慶応三年苗字帯刀・喇叭手嚮導役↓脱走・箱館戦争従軍↓明治三年沼津兵学校喇叭教授方就任↓上京・教導団ラッパ教官就任(沼津市明治史料館通信) 66、二〇〇一年)といった経歴をたどり、戦後静岡藩に帰属し士分となった者がいたという事実も付け加えておきたい。

(21) 横浜語学所は、その後明治二年五月開成所所管から軍務官所管に替わり、三年五月には諸藩生徒三五名が大阪兵学校へ編入され廃校となった(倉沢剛『幕末教育史の研究 三』、一九八六年、吉川弘文館、六三四―六三五頁、柳生悦子『史話まぼろしの陸軍兵学校』、一九八三年、六興出版、二〇二頁)。

(22) 『復古記』第十冊、八〇五頁。

(23) 『復古記』第十冊、一三九頁。

(24) 元神奈川奉行支配下番から政府に採用された別手組は、明治二年三月二四日、八〇名が軍務官に所属替えとなっている(『陸軍省沿革史』『明治文化全集 第三十二巻 軍事篇・交通篇』、一九三〇年、日本評論社、一一九頁)。

(25) 『別冊歴史読本 幕末維新三百藩諸隊始末』(一九九九年、新人物往来社)。

(26) 『増補訂正幕府時代の長崎』(一九一三年、長崎市役所)、一六〇頁。

(27) 『勝海舟全集』別巻1(一九八二年、勁草書房)、一九五頁。

(28) 履歴明細短冊(沼津市明治史料館所蔵・間宮信行関係文書)。

(29) 「由緒書」(持田みつ氏所蔵)。

(30) 「親類書」(寺家村和子氏所蔵)。

(31) 「由緒書」(栗原敬之氏所蔵)。

(32) 履歴明細短冊(沼津市明治史料館保管・大野寛一関係文書、拙稿『沼津兵学校関係人物履歴集成』(沼津市博物館紀要) 22、一九九八年)に翻刻・掲載。

(33) 履歴明細短冊(世田谷区立郷土資料館保管・石井家文書、註(32)前掲拙稿に翻刻・掲載)。

- (34) 履歴明細短冊(樋田英一氏所蔵)、沼津市明治史料館編・刊『西沢田平松家・東沢田樋田家文書目録』(一九九七年)に翻刻・掲載。
- (35) 註(14) 前掲『遠江国相良勤番組士族名簿』。
- (36) 「由緒書」(大野嶺雄氏所蔵)。
- (37) 築山確郎「由緒書」(築山虎次氏所蔵)、註(32) 拙稿に翻刻・掲載。
- (38) 東京大学史料編纂所所蔵「幕臣志村貞康日記 一」慶応四年六月二十八日条。陸軍頭を陸軍総裁の後身と考え、三月時点で新設され服部常純が任命されたとする文献もあるが(大野嶺雄「沼津兵学校と其人材」、一九三九年、二〇頁、前掲「幕臣志村貞康日記 一」慶応四年六月十九日条には「当時者奉行名義御廃し陸軍頭二成、阿部邦之助殿并井上八郎殿三而」云々とあることから、むしろ陸軍奉行の後身であり、設置も六月と考えるべきであろう。陸軍頭に就任したのは阿部潜である。
- (40) 拙稿「大築尚志略伝」(沼津市博物館紀要)11、一九八七年、註(32) 前掲拙稿、原平三「市川兼恭」(一九四一年、温知会、七四頁、石橋純彦「沼津兵学校職員伝」(二)「同方会誌」四十七、一九一八年、拙稿「沼津兵学校関係人物履歴集成 その二」(沼津市博物館紀要)二七、二〇〇三年)、赤松則良日記」(国立国会図書館憲政資料室所蔵・赤松則良文書)、大久保利謙編『西周全集』第三卷(一九六六年、宗高書房、八二五頁)。
- (41) 静岡県編・刊『静岡県史 資料編16 近現代二』(一九八九年、一九三頁。ほぼ同文の史料は、静岡県史料刊行会編『明治初期静岡県史料』第五卷(一九七一年、静岡県立中央図書館)にも掲載。なお、陸軍総括をかつての陸軍総裁の後身と考えてよいかどうかは不明である。陸軍御用重立取扱には、後に井上八郎・藤沢次謙・江原素六も加わった。陸軍総括に就任した服部常純・河野左門は、家老に次ぐ藩の重役である中老であり、それぞれ「海陸軍并学問所御用」「大奥并海陸軍御用」という職務分担であった(東京大学史料編纂所所蔵「静岡藩御達留一」)。
- (42) 「沼津市史 史料編近代1」(一九九七年、沼津市、三九四頁。他に、石橋純彦「沼津兵学校沿革」(二)「同方会誌」三十八、一九一五年)、「八王子子人同心史 資料編II」(一九九〇年、八王子市教育委員会)にも収録。
- (43) 註(4) 前掲『明治前期地方政治史研究 上』、二〇四頁。
- (44) 「静岡県史 通史編5 近現代二」(一九九六年、静岡県、一二頁)。
- (45) 石橋純彦「沼津兵学校職員伝」(三)「同方会誌」五十、一九二〇年、二六頁、復刻版合本第八巻、一九七八年、立休社、註(39) 前掲「沼津兵学校と其人材」(四頁) など。
- (46) 「官録」(立田稔氏所蔵)、註(16) 前掲・拙稿「沼津兵学校関係人物履歴集成
- その二に翻刻・掲載。
- (47) 「浮天斎日記 巻四」(東京大学史料編纂所所蔵)。同日記のその後の部分には、七月五日「出明細書於会計所」、八月九日「塚本恒輔来携タセンブック」、九月一日「行塚本託会計所之事」といった記事もある。
- (48) 註(16) 前掲「岳陽名士伝」、一〇二四頁。
- (49) 註(40) 前掲「市川兼恭」では、市川は塚本とともに作成した学校規則を五日に提出したが、その内容については「現在何も知る事を得ない」としている。なお、市川は静岡には移住せず、新政府に出仕し京都兵学校の教授となった。
- (50) 註(16) 前掲「岳陽名士伝」、一〇二五頁、註(6) 前掲「急がば廻れ」、三六七・三七〇頁、註(7) 前掲「江原素六先生伝」、上篇二六・一二七頁。ただし、後の二書では、榎本のほうから江原らに面会を求め脱走に加わるよう勧誘したことになっている。
- (51) 立田彰信「日記摘録」(立田稔氏所蔵)。
- (52) 「静岡県史 資料編16 近現代二」、一九二頁。石橋純彦「沼津兵学校沿革補遺」(同方会誌)五十、一九二〇年、三二頁、復刻版合本第八巻、一九七八年、『明治初期静岡県史料』第五巻(六頁)にもほぼ同文史料。
- (53) 註(31) に同じ。
- (54) 註(46) に同じ。
- (55) 註(32) に同じ。
- (56) 「沼津市史 史料編近代二」、四一・四四頁。
- (57) 類については、拙稿「沼津勤番組十八番類」(清水町史だより)第一二号、二〇〇〇年)で考察したが、その起源については明確にできていない。なお、明治二年二月四日付の静岡勤番組布達に「勤番組之者今般類々御定相成候二付」とあることから(静岡県立中央図書館所蔵「雲溪庵日記」、静岡等の各所勤番組では陸軍生育方に由来する沼津・田中よりも遅れて類編成が行われたと思われる。
- (58) 「御役名鑑」(沼津市明治史料館所蔵)。同史料は、『沼津市明治史料館通信』第六五号(二〇〇一年)に写真が掲載。
- (59) 明治元年一月四日付大川梅翁宛大川通久書簡(大川幸作氏所蔵、拙稿「生徒の手紙が語る沼津兵学校のあとさき」(田村貞雄編『徳川慶喜と幕臣たち』、一九九八年、静岡新聞社)に翻刻・引用)。
- (60) 教授方の任命月日については、『静岡県史 資料編16 近現代二』(一九二・一九五頁)などによる。西の頭取任命については、『西周全集』第三巻(解説一三七頁)では一〇月二四日になっている。
- (61) 生徒の任命月日については、「幕臣志村貞康日記 一」(東京大学史料編纂所

- 所蔵、前掲拙稿「沼津兵学校関係人物履歴集成」、大野伴三「由緒書」（大野嶺雄氏所蔵）、松浦元治「明治維新で清水地域に移住してきた旧幕臣家族」（清見渥）第三号、一九九三年、一七〇頁）などによる。
- (62) 文部省編『日本教育史資料』一（復刻版、一九六九年、臨川書店）、二〇二頁。
- (63) 二年四月四日付大川梅翁宛大川通久書簡（大川幸作氏所蔵）、前掲「生徒の手紙が語る沼津兵学校のあとさき」に翻刻・引用。
- (64) 註（59）に同じ。
- (65) 註（52）前掲「沼津兵学校沿革補遺」、三三頁。
- (66) 同前、三二～三三頁。
- (67) 生徒であった築山確郎は、二年八月生育方頭取支配となっている（前掲「沼津兵学校関係人物履歴集成」）。
- (68) 註（12）前掲「沼津兵学校沿革（五）」、二八頁。
- (69) 明治三年「静岡御役人附」（『静岡県史 資料編16 近現代一』、一一二頁）には、「生徒」として石川八十五郎以下一五名の名前がある。
- (70) 村松勝平「由緒書・親類書」（林重臣氏所蔵）。
- (71) 天野駒吉「由緒書」（天野勝美氏所蔵）。なお、廃止の前段として、明治二年六月、書院組は「陸軍之手ヲ離レ」（幕臣志村貞廉日記 二）二年六月二四日条）ている。
- (72) 「静岡藩御達留一」（東京大学史料編纂所所蔵。石橋純彦「沼津兵学校沿革（六）」（『同方会誌』四十三、一九一六年、二一頁、復刻版合本第七巻、一九七八年、立体社）にも同文史料掲載）。
- (73) 宮地正人「幕末維新期の社会的政治史研究」（一九九九年、岩波書店、四一四頁）。
- (74) 註（72）前掲「静岡藩御達留一」。
- (75) 『静岡県史 通史編5 近現代一』、三六～三七頁。
- (76) 註（72）前掲「沼津兵学校沿革（六）」。ただし、三〇〇〇名の常備兵について政府が静岡藩に発した命令については、原文は不明。ちなみに、明治政府が諸藩に発した、明治元年閏四月二〇日の陸軍編制法（万石五〇人藩地常備、三年二月二〇日常備編隊規則（万石六〇人）は、二年一〇月に静岡藩が受けたという命令とは時期がずれており、当てはまらないように思える。また、二年七月六日付で岩倉具視に宛てた勝海舟の報告には、「恣に兵備世話仕り候ては、往々の大御趣意に相障り申すべき哉と愚考仕り候間、兵隊は悉く解き、陸軍兵頭の者共、教授頭並びに教授世話方兵士は、生育方と仕置き、専ら學術致させ置き、操練等は止め置き候事に御座候。此度仰せ出され御座候上は、士族若年の者は追々益々勉勵、御用立ち候程の兵隊取立て候心得に御座候事」（勝海舟全集）21、一九七三年、五三九頁）とあり、操練等を廃止した静岡藩側の思惑とは裏腹に、七月時点ですでに「兵隊取立」の政府方針が示されていたらしい。「此度仰せ出され」たという政府命令と、一〇月の三〇〇〇名常備兵命令とがどのような関係になるのか、現在のところ不明である。
- (77) 前掲「沼津兵学校沿革（六）」、二三頁。
- (78) 辞令（沼津市明治史料館所蔵・大築尚志関係文書）。
- (79) 前掲「沼津兵学校沿革（五）」、二九頁。
- (80) 前掲「沼津兵学校沿革（六）」、二三頁。『静岡県史 資料編16 近現代一』（二〇〇頁）、「静岡藩御達留一」（二年一月七日付、東京大学史料編纂所所蔵）にも同文史料が掲載。
- (81) 前掲「沼津兵学校沿革（六）」、二二頁。前掲「静岡藩御達留一」（東京大学史料編纂所所蔵）にも同文史料が記されている。
- (82) なお、明治元年一月中旬に発せられた布達では、勤番組所属の「不勤の面々」であっても「身体剛壯」で「兵士の動向に堪候程」の者は、陸軍生育方頭取支配へ編入可能であり、志願者は申し出るようにとされており（『静岡県史 通史編5 近現代一』、二二頁）、勤番組から兵士が輩出されるルートがすでに用意されていたことがわかるが、それはあくまでも生育方への所属替えが前提であった。
- (83) 小島勤番組「明治三年廻状留」（江川文庫所蔵）。
- (84) 前掲「沼津兵学校沿革（六）」、二二頁。
- (85) 『沼津市史 史料編近代1』、六五～六六頁。
- (86) 註（31）前掲「由緒書」。
- (87) 拙稿「史料紹介 山本鈴木家文書中の静岡藩御用留」沼津兵学校関係史料を中心に」（『葦山町史の葉』第14集、一九九〇年）。
- (88) 「沼津兵学校沿革（六）」、二二頁。
- (89) 前掲「幕臣志村貞廉日記 三」明治三年九月一五日程。
- (90) 前掲「沼津兵学校沿革（六）」、二二～二三頁。
- (91) 同前、二二頁。
- (92) 註（39）前掲「沼津兵学校と其人材」、八六～八七頁。
- (93) 拙稿「史料紹介 沼津兵学校人名簿」（『沼津市博物館紀要』21、一九九七年）。
- (94) 戸張胤邦「履歴書」（戸張眞明氏所蔵）。
- (95) 岡本昆石「予が英学修業の道中」（『同方会誌』四十九、一九一九年、復刻版合本第八巻、三九頁）。
- (96) 前掲「沼津兵学校沿革（六）」、二三頁。
- (97) 前掲「明治初期静岡県史料」第五巻、一四～一七頁。

- (98) 江原素六「維新前後の経歴談」(『同方会誌』二十四、一九〇三年、復刻版合本第四巻、一九七七年)、二四頁。
- (99) 註(6) 前掲『急がば廻れ』、三八六―三八七頁。
- (100) 註(42) 前掲『沼津市史 史料編近代1』、六八―六九頁。
- (101) 三年八月一〇日頭取より兵学校政府移管の見込みにつき達(『沼津兵学校沿革(七)』、『同方会誌』四十四、一九一七年、九頁)。
- (102) 三年九月静岡藩より政府に対し沼津兵学校教授・生徒の貢進を請願(『太政類典』、『静岡県史 資料編16 近現代1』に掲載、二〇一―二〇二頁)。
- (103) 『静岡県史 資料編16 近現代2』、一九五―一九六頁。
- (104) 前掲『明治初期静岡県史料』第五巻(六―八頁)、『実現しなかった箱館戦争への出兵』(『沼津市明治史料館通信』第53号、一九九八年)。
- (105) 山本政恒『幕末下級武士の記録』(一九八五年、時事通信社)、一三五頁。
- (106) 『静岡県史 資料編16 近現代2』、九〇頁。
- (107) 前掲『明治前期地方政治研究 上』、二〇七頁。
- (108) 市原正恵「山田大夢『戊辰後経歴』―駿州移住一士族の記録―」(『地方史静岡』第六号、一九七六年)、九〇頁。
- (109) 荒川重平日記(荒川鐵太郎氏所蔵)。
- (110) 石橋純彦「沼津兵学校沿革(八)」(『同方会誌』四十八、一九一八年、復刻版合本第八巻)、四八頁。
- (111) 政府・兵学寮刊『陸軍日典』と内容のため、明治四年一月出版不許可になっている(国立公文書館所蔵「公文録」)。
- (112) 管見の限りでは、『野戦要務』は香川大学附属図書館所蔵(神原文庫)、『仏蘭西歩兵程式』は沼津市明治史料館所蔵の、それぞれ一セットしか発見されておらず、『兵学程式』は香川と沼津に一セットずつ残るのみである。
- (113) 同時期、徴兵制実施よりも国民普通教育の充実を先決と考え、士官養成を優先するよう主張した山田顕義の存在がある(前掲『改訂明治軍制史論(上)』、二六〇―二六一頁。阿部・江原らの思想と似通っているが、単なる偶然であろう)。
- (114) 園田英弘『西洋化の構造』(一九九三年、思文閣出版)。
- (115) 註(87) 前掲『史料紹介 山本鈴木家文書中の静岡藩御用留―沼津兵学校関係史料を中心に―』。
- (116) 註(6) 前掲『急がば廻れ』、三四二―三四三頁。
- (117) 長州藩の奇兵隊には、同志的結合を組織化したといふべき佐長会議があり、隊の中では垂直軸の力とは別に水平軸の力が強く働いていたという(田中彰「高杉晋作と奇兵隊」、一九八五年、岩波新書、三〇―三一頁、一九二―一九三頁)。

幕府陸軍と奇兵隊とは違いが大きい、個人の意見尊重と下意上通のルートづくりは、限定的な意味においては共通するものがあつたと考えてもよいかもしれない。

(国立歴史民俗博物館研究部)
(二〇〇四年三月二六日受理、二〇〇四年七月二一日審査終了)

The Dissolution of the Shogunate's Army and the Establishment of the Numazu Military Academy in the Shizuoka Feudal Domain

HIGUCHI Takehiko

It is correct to acknowledge that the Numazu Military Academy established in early Meiji by the Shizuoka clan, which represented a newer and different face of the Tokugawa shogunate, was the final site for the advancement of military reforms by the shogunate at the end of Tokugawa period, albeit within an extremely limited scope that saw its evolution to a military officer training institute. However, fundamental differences between the Shizuoka clan – the regional government – and the shogunate – the central government – meant that their relationship by no means constituted one of linear succession concerning the overall military system. Unlike the navy, where desertion and annihilation caused it to vanish spontaneously, the enormous might of the army that had been created during the Tokugawa period was not needed by the Shizuoka clan, and subsequently underwent large-scale restructuring. The shogunate's policy of strengthening the military was turned on its head by the Shizuoka clan, which took a path toward disarmament. There were more than a few areas in which there was not only no quantitative succession, but in which there was an absence of qualitative succession as well.

This paper first examines the existence or otherwise of a relationship of succession between the Numazu Military Academy and the military academy established by the shogunate at the end of the Tokugawa period. It then reveals that there was no continuation between the former and the latter, which was established by a French military advisory group, either in terms of personnel or in organization.

Next, I investigate the process of the dissolution and the reorganization of the shogunate army that began around May and June 1868, which constituted the process of the establishment of the Shizuoka clan's military system. There is no mention in "Zoku Tokugawa Jikki" (a history of the Tokugawa period), "Ryueibunin" (records of the appointment and dismissal of shogunate officials) or "Rikugun Rekishi" ("History of the Army") of changes to military organization after the fall of the shogunate, that is, after May 1868. In other words, there is a vacuum of documentary evidence on an interim process that connects the shogunate army with the military system of the Shizuoka

clan. This paper will clarify the actual situation at this time.

This paper will examine the characteristics of the Shizuoka clan, which adopted an unusual military system whereby it did not have any regular troops though it did maintain back-office groups for educational and work programs, within the context of its relationship with the Numazu Military Academy. It examines the existence of trained troops who were stationed at the Numazu Military Academy in 1870. Although it is thought that the academy had the equivalent of 3,000 regular troops as prescribed by government ordinance, the truth of the matter is that not only did the number of troops fall short of the number required, but they were noncommissioned officer candidates and not mere rank and file soldiers.

Although the Shizuoka clan had to discard many of its assets from the period of the shogunate army, it appropriately took over some good quality assets. In addition, the clan added new personal networks and ideas that had not been part of the shogunate army, and stood its ground against the Meiji government. They did this through the Numazu Military Academy and through the system of trained troops. As for the question of whether or not they conscripted civilians into the army, the Shizuoka clan did lag behind the government and other clans on this point. However, with regard to non-military education in the form of primary and secondary education, they exhibited a progressive approach that was ahead of the rest of the country. That is, they led the way with modernization of their educational activities rather than with their military activities. In fact, the Numazu Military Academy epitomized a school where the emphasis was on learning rather than on military affairs.